
ヒーロー×アニメ物語

ジュネッスインフィニティー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヒーロー×アニメ物語

【Nコード】

N8413W

【作者名】

ジュネッスインフィニティ

【あらすじ】

これは新たな光と仮面の戦士達のリメイクです。

天ノ川学院、通称天学、この学校は生徒達の個性を大事にする学校であり一筋縄では行かない生徒ばかりである。

この学校に三人の転校生がやってくる、一人は熱血、一人は不思議ちゃん、一人は喧嘩っばい、さてさてこれからどうなってしまうのか……

プロローグ（前書き）

リメイクです、間違えて短編になってた、短編から連載に変えられないなんてめんどくさ。

ブローグ

ここは風都にあるとある学校、天ノ川学院、この学校は小学、中学、高校とエスカレーター式の学校であり生徒の個性を大切にするため一筋縄では行かない個性的な生徒ばかりである。

天小、天中、天高と各部によって呼び方が異なる場合もあるがほとんどは天学と呼ばれることも。

お金持ち、アメフト部、野球部、科学部、オカルト、探偵、貧乏執事、魔法少女、スイッチを持つもの。

今回この学校の高校一年に三人の転校生が来る事になっていた。

運命の出会い（前書き）

この話はリメイク前の物に色々付け加えたものです。
魔弾組と剣組が変更になります。

ちよつと出したいのがあります。

後、1月の設定ですがもうハヤテとヒナギクは付き合っている事に、あまりここは突っ込まないで頂けると幸いです。

運命の出会い

1月のある日、天学へ登校中の生徒達。

「寝過ごした寝過ごした〜！」

そして一人、寝過ごしまウンテンバイクに乗り駆ける金髪の男が居た。

名前は八雲カズキ、天高の一年生である。

「やべえよ、寝過ごしたよ、まったく母さんも寝坊だしどうしてくれるんだよおおおおおっ！！！！！！！！」

一人叫びながらひたすら必死になりペダルを漕ぐ。

そして橋を渡ろうとしたらその上に二人の男女が居て女子生徒が手紙を男子生徒に渡すが。

「こんなもの、時間の無駄だ」と言いながら手紙を川に捨ててしまった。

（おいおい、読まないで、しかも目の前で捨てるなよな）

頭の中でその男子生徒を非難しながら橋を通り過ぎていった。

「おい待てよ！」

誰かがその手紙を捨てた男子生徒に話し掛ける、男女共に青を基準にしたブレザーの制服を着ているがその話し掛けた誰かは黒い学ランでリーゼントと昔なヤンキーの格好をしていた。

「女からの手紙を読まないで捨てるなんて許せねえ！」

「時間の無駄だからな、僕は行かせてもらう」

ブレザーの男子生徒はそのまま去ろうとしたが川に捨てられた手紙を拾おうと違うブレザーの男子生徒が川に降りるとすぐに手紙を見つけて。

「ありましたありましたー！
手紙ありましたー！」

その生徒は茶髪で真面目そうな男子で、手紙を拾うと壁を登り橋に立った。

「これ、落としましたよね？」

その発言に「ハッ!？」となった、捨てたのに落としたってどんだけだと思ったのだろう。

「せっかくの手紙なんですから大事にしないと」

手紙を捨てた男子生徒は呆気を取られ手紙を受け取ると歩き学校へ向かった。

「さて僕も、じゃあまたお会いしましょう！」

手紙を拾った男子生徒は走り去っていった。

「なんだあいつ？面白え奴だな」

学ランの男子生徒も学校へ、三人共同じ方向へ進んでいた。

「にゃー！遅刻だ遅刻」

すると次に橋を渡ろうとしていたのは茶髪でサイドテールの女子生徒、高町なのはだった。

「飛んでいつていいかなレイジングハート!？」

【ダメですマスター】

なのはが話しているのはデバイスと呼ばれるアイテムで赤い宝石のレイジングハート・エクセリオン、デバイスは魔導士と呼ばれる魔法使いが使うものでなのはも魔法使いだった。

「飛ばしてよー!」

【ダメです】

レイジングハートはダメですの一点張りで許可しなかった、魔導士の姿になるには社会人なら自分の意志、学生ならデバイスの許可がないとなれないのだ。

天学は生徒の個性を大事にしているため飛んでもいいのだがレイジングハートはそれではなの是为了に思わない許可しなかった。

【だいたいマスターが二度寝するのが悪いんですよ？】

「だって朝弱いんだもん！」

【理由になりません】

厳しいレイジングハートさん。

「なのはお先に！」

すると隣を金髪の長い髪の子女子生徒、フェイト・テストロッサがオレンジの毛の大型の狼、アルフに乗り通り越した。

「フェイトちゃんのアレはいいの！？」

【使い魔がいいならいいです】

理不尽な答えが返ってきた。

天高のとある教室ではお嬢様と執事と生徒会長がもめていた。

「だからハヤテくんは私のものなの～！」

「だが私の執事でもあるぞ！」

「まあまあ落ち着きましようふた」「うるさい！ハヤテ（くん）は黙ってて（ろ）！」「はあ……」

喋りきろうとしたが最後まで喋れなく溜め息をついたのは水色の髪
の毛で空色の瞳で女の子の顔だがれっきとした男の子のマドカ・ハ
ヤテ。

喧嘩しているのはハヤテをくん付けで呼んでいるのは桃色のロング
ヘアで金色のヘアピンで止めていて瞳も金色で胸が可哀想なのは
桂ヒナギク、ハヤテの彼女。

もう1人は金髪のツインテールで緑色の瞳で背がちっさいのは三千
院ナギ、ハヤテはナギの執事である。

（このお二人は本当にもう困ったものですね）

そう思っていると。

「ちょっとヒナギク、ナギ、落ちっこうよ」

「「フェイト！」」

そこにフェイトが喧嘩を止めに入った。

「ハヤテが困ってるよ」

「そ、そうなのだが」

「た、確かにそうよね、ごめん、ハヤテくん」
「いえ、良いんですよ」

ハヤテは気にしていなかった。

「ありがとうございますフェイトさん」

ハヤテは基本女性は苗字で呼ぶことが多いがフェイトは名前だった。

「いいのいいの」

この4人は高校一年生であるがナギは飛び級生である。

「そう言えば今日このクラスに転校生来るみたいね」

「そうなの？」

「うん、お姉ちゃんと風見先生にジェイル先生達が話してた、それに私のクラスにも来るみたいだし」

ヒナギクはこの3人とは違うクラス。

お姉ちゃんとは実の姉で世界史担当の桂雪路のこと、風見先生とは中部部の科学担当の風見志郎でジェイルとは高等部の科学担当のジェイル・スカリエッティのこと。

「冬休みが終わってすぐに今日だけで一気に3人も来るとはな」

ナギの言う通り冬休み終わった後であり新学期が始まるのだ。

「それもそうよね」

すると……

「ヒナちゃん、そろそろHR始まるよ」

「分かった！なのは先に教室戻って」

話し掛けたのはなのはヒナギクとは同じクラスである、ギリギリ間に合ったようで息が切れている様子。

「分かった！じゃあ先に戻ってるね、じゃあねフェイトちゃん」

「また後でねなのは」

なのはとフェイトは親友で後もう1人八神はやてと言う少女も居るが先に自分の教室に戻っていた。

ハヤテと同じ名前のためヒナギクはハヤテくんと呼んでいてナギは八神、ハヤテは八神さん、フェイトはハヤテとはやて両方同じで呼ぶがどっちを呼んでいるかなぜか解る。

ヒナギクは自分の教室に戻りハヤテ達は自分達の席に座った。

「では今日は転校生が来てるよ！」

テンション高いのはヒナギクの姉でこのクラスの副担の桂雪路。

「んじゃ入って〜」

ガラガラ〜とスライド式のドアを開けて転校生が入ってきた、入ってきたのは橋で少し揉めていた真面目そうな男子生徒だった。

「そんじや名前言つて〜」

「はい！^{ひかるみらい}輝未来です！よろしくお願いします！！」

少年の名前は輝未来、未来は元気良く自己紹介をした。

「それじゃ輝くんはテストロッサさんの隣の席ね」

「はい！」

未来はそう指示されるとさっきみたいに元気良く大きな声で返事してフェイトの隣の席に座る。

「よろしくね、私フェイト・テストロッサ」

「よろしくお願ひしますテストロッサさん」

「フェイトで良いよ、私も未来って呼ぶから」

「はい！よろしく願いますフェイトちゃん」

「解らない事があったら何でも聞いてね」

フェイトは笑顔を交えてそう言う。

「は、はい……／／／／」

未来の顔は赤くなった。

ヒナギクとなのはの教室では。

「みんなは知っているかもしれないが転校生が居るよ」

ここの担任のジェイル・スカリエッティ、天才だが生徒のほとんどに変態と呼ばれている。

「誰か変態って言った！？」

生徒から引かれたため咳をして「とりあえず気を取り直して、入ってくれ」と言うとまたガラガラとスライド式のドアが開き髪の毛が青で瞳が赤の男子生徒が入ってきた。

「では自己紹介を」

かざもりれいと

「風森零斗、よろしく願います」

名前は風森零斗、ハヤテ達のクラスの未来よりは素っ気なく自己紹介し。

「では君は高町くんの隣の席に座ってくれ」

「はい」

零斗は言われた通りに指示された席に座り。

「私、高町なのは、よろしくね」

フェイトと同じように笑顔を交えてなのは自己紹介した。

「あ……………ああよろしく／／／／」

零斗は顔が赤くなっているのを隠すように横を向いた。

「どうしたの？」

「べ、別に…………／／／／」

そして未来と零斗は……

（（か、可愛い…………））

同じ考えを持っていた。

別のクラスでは…………

「転校生が来ているで〜」

そのクラスの担任で金髪の女性教師、黒井ななこが転校生を紹介しようとしていた。

その転校生が入ってくると先ほど橋で揉めていた男子生徒だった。

「ほな黒板に自分の名前書いて自己紹介してな〜」

男子生徒は黒板に大きく字を書く。

「水月^{みづつき}げんただ、俺の夢はこの学校全員の生徒と友達になることだ！」

名前は水月げんたと言いその自己紹介に引く者も居たが一人だけ。

「もしかしてげんちゃん!？」

「その小さい背にアホ毛はこなたか！」

そこで声を上げたのは青く長い髪の毛で緑の瞳で背が低く高校生なのか疑うがれっきとした高校生の泉こなただった。

「うわあゝ酷ーい」

げんたはこなたの近くまで行き二人は拳を上下にぶつけ合いそして最後に拳を前に出してぶつけるという挨拶的な行動をする。

「小学三年ぶりだね！」

友達百人つくるのが夢だったよね」

「今じゃ千人だぜ！」

そんなこなたもまだアニメや宇宙好きのか？」

「もちコースだよ！」

旧友の二人が再会を喜んでいるとげんたは後ろに居た男子生徒に目が入る。

「あーっ！お前今朝の！」

「君が転校生だったのか」

それは橋で揉めていた生徒で名前は歌星けんご。

「女の手紙を読まずに捨てるなんて気に入らねーな、だから俺はお前とダチになる」

「何言ってるんだ」と呆れるけんごだが。

「ちょっとさ、ホームルーム進めさせてえなあ」

ななこのその言葉によりホームルームは再開されげんたは自分の席に座った。

その頃、房総半島沖に設置されてある時空防衛軍訳してSTDF所属の防衛チームGUTSの極東基地ダイブハンガーの指令室では。

「みんな、今日から新しく入る隊員を紹介するわ」

そこにはGUTSの女性隊長のイルマ・メグミが隊員達に呼び掛けていた。

「新人隊員ですか？」

一番に反応したの隊員の1人のシンジウ・テツオ、GUTSのエイスパイロット。

「これで7人揃うんや」

次にホリイ・マサミ、主に新兵器の開発や現場に出て物質の解析を担当。

「そうですね！楽しみです！」

オペレーターのヤズミ・ジュン。

「そうね、貴方にも後輩ができるけど年上かもしれないわよ」
「た、確かに」

ヤズミの言葉に突っ込んだのはコイシカワ・ミズキ、シンジヨウに並ぶエースパイロット。

「隊長、連れてきました」

そこに新人隊員を連れて指令室に入ってきたのはベテランのムナカタ・セイイチ副隊長で……

「それじゃ自己紹介して」

「はい！トウマ・カイトです！よろしくお願いします！」

彼の名前はトウマ・カイト、今回の入隊試験で合格して入隊したボランティア上りの隊員だ。

「貴方はあの時の」

「貴女は火山噴火の時の」

カイトとミズキは面識があった。

未来、零斗、げんた、カイトがフェイト、なのは、こなた、ミズキ
と出会いで始まる様々な物語がこれから始まるのだった……

ヒーロー×アニメ物語

始まります

運命の出会い（後書き）

次回予告はなしで行こうかと思っています。
取り敢えず次回は見た事あるかもしれないですが。

未来は無限大（メビウス）！（前書き）

これはあまり変更点がないので白皇の部分を天学か天高にして投稿します。

もし白皇の文字を見つけたら報告をよろしくお願いします。

未来は無限大（メビウス）！

未来と零斗、げんたが天高に転校してから三日が経った。

（今日で三日目、何も起こらずに時間が過ぎてったな……………）

早朝、未来は海鳴市と言う街からバスで学校へ向かおうとしてバス停に並んでいた。

「あ、未来」

「フェイトちゃんにアリシアちゃん、それに雷羽ちゃん」

そこにフェイトと少し背が低いが姉のアリシア・テストロッサ、そして2人は金髪だが水色の髪の毛で一応三つ子の妹の雷羽・テストロッサがやって来た。

「おはよう未来」

「未来おはよう」

「おはようございます、アリシアちゃん、雷羽ちゃん」

「おはよう、未来」

「おはよう……………ございます、フェイトちゃん」

フェイトに挨拶されると顔を赤くする未来。

「どーしたの未来？」

雷羽は未来の下から覗き込むように見上げる。

「なな、何でもないよー!」

「ふーん」

「転校してきてからここで良く会っけど未来も海鳴市に住んでるの？」

「うん、そうだよ」

「どこに家が在るの？」

「この街の中心にあるマンションの四階に住んでるよ」

「この街の中心って僕達と一緒にじゃん！」

「そうなの雷羽ちゃん!？」

「そうだよ」

「ご近所さんなんだね未来の部屋は」

自分達が住んでいる所を話していたらバスが来てそれに乗り込みまだ誰も座っていない後ろの席に、アリシア、フェイト、未来、雷羽の順で座ると回りの白皇の男子生徒の殺気が込められた視線が全部未来に向く。

（何でみんなそんなに怖い目で見るのかな？）

未来はなぜ怖い目で見られているのかが解っていない様子なので説明しよう。

テストロッサ姉妹は天ノ川学院で生徒会長のヒナギクと並ぶ人気を持った女子生徒でそんな3人といきなり仲良くなったため未来にテストロッサ姉妹派の男子生徒の敵意がほとんど向いている状態。

（（みんな怖いよ））

3人は自分達がそんなに人気があるのを自覚していないから殺気の原因が解らない。

そして、このバスが出発した後にバス停にはまた人が並び今度は零

斗が並んでいた。

「零斗くん、おはよう」

「お、おはよう、なのは」

そこに今度はなのはと一応親戚と言う事になっている髪の毛が栗色でショートヘアーの高町星奈がやって来た。

「おはようございます、風森」

「おはよう、セイナ」

「良く会っね、どこに住んでるの？」

さっき未来にフェイト達が質問したみたいなのはも住んでいる所を聞いてみた。

「この街の中心に在るマンションの四階」

「雷羽達と一緒にですね」

「そうなの？」

「うん、そうだよ」

そこにバスが到着、乗り込みまた後ろに席に零斗が2人に囲まれるように座る。

（なんだこの殺気？）

やはりなのはと星奈も人気があるため高町派の男子生徒達に睨まれるはめになる。

（何でみんなこんなに怖い目してるのかな？）
（解りません）

2人は念話と呼ばれるもので声に出さず会話する、やはり2人も自覚していなかった。

そして先に発車した未来達が乗ったバスは天高の近くのバス停に到着し、降りて歩きで学校へ向かう。

（あれ？またみんなこっち見てる）

バスから降りれば学校へ向かう生徒達も多くなるため未来へ向けられる殺気が多くなるのも無理がない。

「あ、未来くん達」

「ハヤテくん、おはようございます」

「おはようございます」

そこで1人で学校へ向かうハヤテと会い挨拶すると。

ギロツ！

（また怖い目で見てる）

ハヤテにも殺気向けられる、理由は天高で人気のあるヒナギクと付き合ってるからハヤテに向けられる殺気は未来よりすごい。そこに……

「ハヤテくん！」

「あ、おはようございますヒナギクさん」

「輝くんとフェイト達もおはよう」

「「「おはよう」「」」

「おはようございますヒナギクちゃん」

ヒナギクも来て挨拶する。

「ナギは？」

「またS A B O R Iです」

「やっぱり」

「何でもこんな学校にこないんだろーね？」

「私も気になった」

「まったくしょうがない子よね」

ヒナギクは呆れたようにそう言う。

「まあハヤテくんが連れてこれなかったのは今日は本当に行きたが
つてない証拠だし」

ヒナギクも今日はしょうがないと諦めた、勝ち負け関係ないから諦
めた。

色々話ながら未来達は学校の敷地内に入り、校舎の中に入るとそれ
ぞれの教室に入った。

その頃、宇宙では……

「ギシャアアアアッ！！！！！！！！！！」

メタリックブルーの硬い皮膚に長いムチ状の二本の尻尾に長い首に

赤い四つの細長い目に胸には赤く光る発光体が目みたいに四つある
宇宙斬鉄怪獣ディノゾールが地球を目指し飛行していた。

シューーン！スパン！

ディノゾールは目の前に漂う小惑星や隕石を細長い舌・断層スクー
プテイザーを超高速で振り回し真つ二つに切り裂き自分が進む道を
切り開いていく。

「地球へ宇宙怪獣が向かってる？」

ダイブハンガーの指令室ではディノゾールが向かっていると解りや
ズミが報告していた。

「はい、過去のデータがない初めての怪獣です」

「新たに現れた怪獣か……」

ムナカタは腕を組みそう呟く。

「宇宙ステーションから送られてきた映像です」

モニターにディノゾールの画像が映し出される。

「総本部はこの怪獣のレジストコードを宇宙斬鉄怪獣ディノゾール
と命名しました、武器は先ほど小惑星を破壊したと報告があり口か
ら放たれる舌、断層スクープテイザー、

背中や様々な皮膚の隙間から放たれる流体焼夷弾融合ハイドロプロパルサーです」

「ヤズミ隊員、ディノゾールは後どれくらいで地球に到着する？」

「早くて三時間、遅くて四時間です」

それから二時間半が経ち天高では、四時間目の授業が終わり昼休みとなっていた。

そして屋上。

（今日は1人で食事か）

そこにハヤテがやって来た。

（お嬢様は引きこもりだしヒナギクさんは生徒会の仕事）

ハヤテが思っている通りナギはする休み、ヒナギクは生徒会の仕事をしているため1人で食事をする事になり屋上へやって来た。

（まあ……慣れてるからいいけど）

ハヤテは産まれた頃から両親が賭事ばっかやって借金作って転校する事が多かった、

それと同時にハヤテと友達にはなっではいけないのかも言われていたので1人で食事をする事が多かった。

（あの2人はちゃんと逃げてるかな？葵とユウキは一億五千万の借金押し付けられて以来会ってないからな……兄さんは……どこに居るかは解らないけど）

ハヤテには兄弟が居る、2人と言ったが兄がいる、だが行方不明、葵は妹、ユウキは弟で一億五千万の借金押し付けられてから消息が掴めていない。

（せめて葵とユウキだけでも見つけないと、あの子達はまだ小学生なんだ）

ハヤテは握り拳を作り妹を絶対見付けると誓う。

（だけど……葵は超能力使えるからどこにでも行けるんだよね、見付けられるのか？）

誓ったもののハヤテはだんだんと不安になっていく。

（だけど見つけなきゃ！3人で一緒にまた暮らしたいしヒナギクさんにも紹介したいから！）

ハヤテは再び決意を固めると。

（自信を付けるためにこれを言おう！）

ハヤテはフェンスの近くまでより一回深呼吸する、そして。

「ウルトラ五つの誓い！

一つ、腹ペコのまま学校へ行かぬこと！

一つ、天気の良い日に布団干すこと！」

ハヤテがウルトラ五つの誓いと言うものを叫んでいると時計塔の最上階にある生徒会室にまで聞こえてくる。

「一つ、道に歩く時には車に気を付けること！」

（ハヤテくんまたウルトラ五つの誓い叫んでる、何かの決意を固めたのかな？）

ヒナギクの思った通りだった。

そしてハヤテが四つ目を言おうとしたら。

「一つ、他人の力を頼りにしないこと！」

ハヤテは誰も居ないと思っていたのでビックリし後ろを向くと未来が居た。

「一つ、土の上を裸足で走り回って遊ぶこと！」

最後は2人同時で言う。

「驚きました、この言葉を知っている人が居たなんて」

ハヤテは未来の隣まで歩く。

「この言葉は昔ウルトラマンが残したものと」

「そうみたいです」

未来も誰かに教えてもらったと言うような感じでハヤテと話す。

「どうしたんですか？ハヤテくん、あんな大きな声で叫ぶ方だとは思わなかったんですが？」

「ちよつと、妹と弟の事を考えまして」

「妹と弟？」

ハヤテは自分の兄弟となぜナギの執事になるまでの系列を話した。

「そんな大変な事が……」

「はい」

「だけどそれをハヤテくん、何で転校して三日しか経たない僕に話してくれたんですか？」

「さあ、何ででしょう？」

ハヤテは屈託のない笑顔でそう言つと突如ウィーン！警報が鳴り響く。

「この警報は！？」

「怪獣警報！うわっ！？」

すると白皇学院の真上をディノゾールが通過するとGUTSの戦闘機のガッツウイング1号が二機とガッツウイング2号がそれを追い通過する。

「GUTS！」

ガッツウイングは機首から緑色のレーザーを連射するがディノゾールには効いていなかった。

「何て硬さなんだ！」

「さすが宇宙怪獣と言う所だな」

二機ある1号にはカイトとシンジョウ、2号にはムナカタとミズキとホリイが搭乗していた。

「しかも市街地に入ってもうた！」

「迂闊には攻撃できない……各機、市街地に被害が及ばないように攻撃せよ」

「了解！」「了解！」

ムナカタの指示に了解と答えるカイトとミズキ達は地上に降りたデインゾールに攻撃を開始した。

「こんな落ち着いた昼下がりに何で怪獣がつて、未来くん！？」

ハヤテが後ろを向くと未来は居なかった。

「未来くん！？」

校内は悲鳴が響き渡っていた、怪獣が現れた事により生徒達は混乱していた。

「落ち着いて！みんな焦らないで避難して！」

生徒達を避難誘導する教師の面々だが声が届いていなかった。

「ダメか……！」

「スカリエッティ先生！」

「やはり彼女じゃないと………！」

すると。

【皆さん！聞いて下さい、生徒会長の桂ヒナギクです】

そこに校内全域にヒナギクの声がスピーカーで響き渡り生徒達は足を止めて耳を傾ける。

【怪獣が出現しましたが落ち着いてゆっくり歩いて避難してください、今GUTSが怪獣と戦って時間を稼いでいますが十分に時間があります】

すると生徒達は落ち着きを取り戻しゆっくりと歩き避難を始める。

「さすがこの学校の生徒会長」

「自分の妹ながらさすがね」

雪路とジェイルは感心していると一気に避難を完了。

「何とかなつたわね」

「さすがヒナ、この学校の教師より役に立つな」

と言ったのは花菱美希と言う女子生徒だった。

「後は怪獣を倒してくれれば」

「私達も避難するか」

「そうね」

ヒナギクと美希は放送室から出て避難をした。

その頃ハヤテは突然消えた未来を探しに誰も居ない校内を走っていた。

「未来くん！どこに居るんですかー！？」

ハヤテは未来の名前を呼びながら走り回る。

「あんな一瞬でどこに……もしかして未来くんもテレポーター！？
なわけないか」

今の考えを棄ててハヤテは外に出る、敷地を出たすぐそこにはディ
ノゾールとGUTSが戦闘中だった。

「あんな近くにまで………」

「ハヤテ！？」

「フェイトさん！」

そこに黒い服で白いマントみたいなのをかけ髪型がツインテールで
デバイスと呼ばれ鎌に似ているバルディッシュ・アサルトと呼ぶ物
を握ったフェイトがやって来た。

「ハヤテ、まだ避難してなかったの？」

「未来くんを探していたので」

「未来を？」

「はい」

「あ、未来も大事だけど今から防衛軍、結界張るから早く避難して
！」

「解りました！」

ハヤテはそう言われ自分も避難する。

「それにしても未来はどこに……あ！」

するとフェイトの目に未来が走っているのが見えた。

「未来！」

フェイトは未来を避難させようと飛んで向かう。

「怪獣がもう現れるなんて………！」

未来は何かを決意し左手を拳にし、拳が上に向くように曲げると赤い腕輪のようなアイテム・メビウスプレスを出す。

シューーン！

未来はそのメビウスプレスの中心に埋められている丸く赤いコア・クリスタルサークルを右手で思い切り回し体を左に大きく捻り。

「メビウウウウゝス!!!!!!!!!!!!!!」

そして左腕を頭上高く上げるとメビウスプレスから金色の光が放たれ未来を包み込む。

「未来!？」

そこにちょうどフェイトがやって来て未来を包んでいた光は空に浮かび光の粒子がパラパラ落ちると銀色と赤の巨人が地上に降り立つ。

「嘘……」

巨人の体と頭部にに流れる赤いラインに胸の菱形の青く輝くクリスタル・カラータイマーが付いており乳白色に輝く目に左腕にはメビウスプレスが着いていた。

「リーダー!あれはもしかして……」

「ウルトラマン!」

そう、それは地球をいくどなく救ってきた我らがヒーローと同じ存在のウルトラマンメビウスが降臨した!

「セアッ!」

メビウスは右腕を伸ばし左腕を拳が上に向くように曲げるファイティングポーズを取ると走り出しディノゾールに戦いを挑む。

「ウルトラマン……あれが!」

「確かコスモス以来だよな?」

「せや、6年前にウルトラマンコスモスが地球にやって来ておるか」

「各機、ウルトラマンを援護する!」

GUTSはメビウスを援護する事にしディノゾールを攻撃する。

（GUTSの皆さんは町に被害が出ないように戦っていた、どうすれば……！）

メビウスはさっきのGUTSの戦いを見て町に被害が出ないように戦っていたため自分も迂闊には大技が出せないでいた。

（大丈夫だよ、すぐに結界張るから安心して戦って、未来）

（えっ！？）

念話で話し掛けられたメビウスは後ろを向くとそこにはフェイトが飛んでいた。

（フェイトちゃん！）

フェイトはメビウスにウインクするとガッツウイングやディノゾールも巻き込み天学一帯は結界と言う空間に包み込まれた。

（結界が壊れない限りここなら町に被害は出ないから思い切って戦って！）

（うん！）

メビウスはさっきのとは違う左腕の拳を前に向けるように曲げるフアイティングポーズを取ると再び走り出しディノゾールの腹部に思いつきキックを繰り出しそれを蹴り飛ばす、

ディノゾールは大きいビルに激突し建物は崩れるが現実空間ではないため被害はゼロである。

「シェアッ！」

次に長い首に掴みかかりパンチしていく。

「ギシャアアアアッ！！！！！」

「ディアッ！？」

メビウスはディノゾールの身体から放たれたハイドロプロパルサーで吹き飛ばされ、それを連発されて危機に陥る。

「ディア……！」

ピコンピコンピコン

メビウスの胸のカラータイマーは青から赤に点滅し始め戦える時間が残りわずかになる。

「ギシャアアアアア！！！！！！！」

ディノゾールは断層スクープテイザーで更に追い討ちをかける。

「ウルトラマンを援護せよ！」

ガッツウイングは一斉にレーザーを連射しディノゾールを攻撃。

「プラズマランサー、ファイヤ！」

フェイトは射撃魔法と呼ばれる種類で金色の魔力弾を連射するプラズマランサーを放ちメビウスを援護する。

「今だウルトラマン！」

カイトがそう叫ぶとメビウスは立ち上がりディノゾールが放った断層スクープテイザーを両手で掴むと。

「バルディツシュ、サイズフォーム！」

【サイズフォーム】

バルディツシュはサイズフォームと言う鎌状の光の刃が現れフェイトはそれで舌を切りディノゾールは攻撃の手段を失う。

「ハッ！」

メビウスはメビウスブレスのクリスタルサークルを回し両手を広げゆつくりと上に動かすと金色に輝くマークが何個か現れ両手のひらに金色のエネルギーが貯まると。

「シエアアアアツ!!!!!!!!!!!!!!」

メビウスは最後に腕を十字に組み必殺技の金色に輝く光線メビウムシュートを発射しディノゾールに当てる。

「ギシャアアアアツ!!!!!!!!!!!!!!?」

光線が止まるとディノゾールは断末魔を上げぐったりと倒れ目に光が失うと絶命、それと同時に結界は解除され壊されたビルは元に戻り現実空間に戻る。

「シエアツ!!」

メビウスは両手を広げ飛び立ち大空へ消えたのだった。

「未来が……ウルトラマン……」

フェイトは天高の屋上に降りるとそこに光の球にがやって来て未来が現れる。

「フェイトちゃん……」

「未来……君は……」

「僕は……見ての通りウルトラマン、ウルトラマンメビウス」
「メビウス、それが君の本当の名前？」

未来は「うん」と頷く。

「だけどこの星じゃ」

「輝未来、その姿じゃ輝未来何だから気にしなくてもいいよ、未来がウルトラマンだって事誰にも話さないから」

「フェイトちゃん……ありがとうございます！」

未来は頭を深々と下げて礼を言う。

「そんなに畏まらなくても……私達、友達でしょ」

「はい！」

未来は頭を上げてそう言った。

新しい光（前書き）

修正したら投稿という形を取っていきたいと思います。

新しい光

メビウスがディノゾールを倒して数日後、未来と零斗が住む海鳴市である異変が起きていた。

「あ、また電気が」

ディノゾールを倒してからの数日間、海鳴市ではよく停電が起きる事が多かった。

「あらまた停電」

ここはなのはの両親が経営を営む喫茶店・翠屋、今喋ったのはその母親の高町桃子。

「最近多いな」

次に父親の高町士郎。

「軍の方でも一応調べてるみたいだよ」

そして姉の高町美由希。

「この前ウルトラマンが現れてからだよね、停電が起こりやすいのは」

「はい、ですがそろそろ復旧しますよ」

星奈がそう言うと電気は再び点灯した。

「すぐに直るのも一番怖いんだけどね」

「そうだ2人とも、今日新しく2人バイト入るから」

「そうなの？」

となのはが言うつと土郎は頷き。

「そろそろ来るはず」

すると店のドアが開き。

「あ、零斗くんに来くん」

「なのはちゃん！」

そこに入ってきたのは零斗と未来だった。

「なんだ知り合いなのか？今日から新しくこの2人がここで働くから」

「結構似合ってますね」

未来と零斗は翠屋で使っているエプロンを着ていた。

「そうですか？」

「まあ……」

（ホントはなのはに言われたかった）

零斗は心の中でボソツとそう呟く。

「それじゃ仕事の内容の説明を」

なのはが何をやるか説明しようとしたらいきなりまた電気が消える。

「また停電だ」

「家に居る時も停電起きたよな」

「確かディノゾールが現れて以来ですよね」

未来がディノゾールの名前を口にする。

「輝、何でディノゾールの名前を知っているのですか？」

「えっ!？」

「まだ軍は名前を発表していないのに」

「確かに……何で？」

未来はどうしようとおどおどしていたら。

「あ、それ私が教えたの」

「「フェイトちゃん!」」

そこにフェイトが同じエプロンを着て入ってきた。

「フェイトちゃんが教えたなら納得」

それで納得してもらい未来は安堵の溜め息をつく。

（未来、気をつけてよ、未来がメビウスなの秘密何でしょ？）
（まあできる限りだけだね）

未来とフェイトは念話で会話をする。

（そう言えば零斗も一緒に転校してきたけど……もしかして？）

（僕と同じウルトラマンだよ）

さらっとそれを教える未来、もう自分の正体バレてるから別に大丈夫。

（未来、そんな易々教えちゃダメだよ？）

（あ………ごめん）

と謝ると再び電気が付く。

「こう何回も停電になると変な感じだよね」

「だよな……」

（この停電、普通じゃねーな）

零斗はこの停電に違和感を感じていた。

（近い内に調べてみるか）

と考えていたら。

「風森くん、輝くん」

士郎が話し掛けてきた。

「何でしょうか？」

「何ですか？」

「なのはには手を出すなよ」
「はっ？」

士郎のその一言で零斗は声を上げ。

「？」

未来はどういう事なのか解らず頭上に疑問符が浮かんでいた。

「なのはを恋愛対象にするなよ、もちろん星奈も」

「お、お父さん！？」

「士郎さん！？」

その言葉にはなのはと星奈もかなり驚く。

「士郎さん」

「なんだい？」

未来が手を上げて何かを質問しようとしていた、その質問の内容でなのはとフェイト達が固まるうとは……………

「れんあいつて何ですか？」

カチンコチン……

「み、未来？」

「どうかしましたかフェイトちゃん？」

未来はなぜ呼び掛けられたのか解らず。

「素なんだ」

「素なんですネ」

「素なんだね」

「素なのか」

「それが未来」

上からフェイト、星奈、なのは、士郎、零斗と喋る。

「？」

やはり未来は何なのか解らなかった。

そして零斗達は仕事を始めた。

それから一時間後。

「……………」

（こ、怖い）

零斗はテーブルを拭いている時や注文された品と食べ終えた食器を運んでいる時もずっと士郎に殺気が込められた目で見られていた。

（ごめんね零斗くん）

なのはは零斗に心の中で謝っていた。

（フェイトちゃん、さっきの士郎さんの言った事、どういう意味？）

（ホントに解らないの？）

（うん）

未来はやはりさっきの会話の内容が解らずフェイトに聞くがやはり解らなかった。

（未来……私が一般常識教えてあげようかな？同じマンションだし）

そう誓うフェイトだった。

「停電？」

「ああ、海鳴市で以上な回数の停電が起きている」

ムナカタがカイトとミズキに海鳴市で起きている怪奇現象の話を話していた。

「2人には今からシャーロックで海鳴市に向かいその調査をしてきて欲しい」

「了解」

そしてカイトとミズキはシャーロックと言う車両で海底トンネルのシークレットハイウェイを通り海鳴市へ向かった。

「カイトはどう思う？この停電」

「どうって……やっぱり以上だと思う、だって一時間で十回は停電になるなんておかしいさ」

「そうね……もしかしたら電気を食べるタイプの怪獣かもしれないわね」

シャーロックはシークレットハイウェイを出て地上に、海鳴市内に

入った。

「ここが海鳴市、確かエース級の魔導師が10人以上も居る街だよね？」

「そう、それも6人ぐらいは高校生よ」

「スゴッ！」

「ほら、この前のディノゾール戦に居たじゃん、金髪の娘が、あの子がそうよ、名前は確か……フェイト・テストロッサだったわね」

そう話していると翠屋の前を通り過ぎようとしたら。

「カイト！あれ見て！」

「あっ！」

ミズキが指差す方をカイトは見るとシャーロックを止める。

「宇宙船！？」

それは円盤状の宇宙人が乗る宇宙船だった、それを見た人々は一斉に走り逃げ出すと騒ぎで翠屋から零斗達が出てくる。

「イルマ隊長！」

「こっちでも見えてるわ」

ダイブハンガーの指令室のモニターに宇宙船は映し出されており。

「目的が解らないからまだ攻撃しないで、もしあっちが撃ってきたらリーダー達を出撃させるからその時はあなた達が先に攻撃して」「了解」

2人はイルマの指示で様子を見る事にしたがそれはすぐに次の指示に移る事になった。

ドガーーーーーン！

宇宙船は下部の尖っている先から黄色い稲妻状の光線を発射、街を破壊し始めた。

「もう撃つてきやがった！」

カイトはシャーロックの後部にあるレーザー砲を起動させ砲門を宇宙船に向け。

「スクロール砲、発射！」

青白いレーザースクロール砲が発射されるが宇宙船は避ける。

「ダメか！」

「追い掛けるわよカイト！」

「ああ！」

アクセルを踏みシャーロックは走り出す。

「フェイトちゃん！」

「分かってる！」

「零斗くん達はすぐにつて、あれえ？」

なのはは逃げるようにと言おうとしたら零斗と未来は居なかった。

「輝は！？」

（もう行っただ）

フェイトは2人の行き先が解っていた、するとメビウスが現れ空を飛ぶ。

「メビウス！」

レジストコードはメビウスに決まって居るためなのはメビウスと叫ぶ。

「セアッ！」

メビウスは金色の手裏剣光線、メビウムスラッシュを放ち宇宙船を追撃するが避けられる。

「なのは、いこっ！」

「うん！」

フェイトとなのはとセイナはバリアジャケットにセットアップ、デバイスを起動させる。なのはのバリアジャケットは白をメインにし青いラインが流れ胸には赤いリボン、サイドテールだったのがツインテールに、デバイスは杖の先に三日月みたいな金色の飾りがついてその中に赤い宝石があるレイジングハート・エクセリオン、星奈のはなのはに似ているが髪型は変わらずバリアジャケットは白ではなく赤紫でデバイスも似ているがそれも赤紫っぽいルシフェリオン。

「それじゃ……！」

3人は飛び立つ、それはカイト達の目に入っていた。

「魔導師！」

「しかもエースオブエースの高町なのも居るわよ！」

なのは一般でも結構有名なため知らない者の方が少ない。

「私達はメビウスを援護しよう」

「うん！」

「解りました」

フェイトはそう言いメビウスを援護する事になった。

（今回も零斗、出ないみたい）

未来が変身したため零斗は離れた場所から戦闘を見ていた。

「セアッ！」

メビウスはメビウムスラッシュを連射し続ける。

「ディバイン……バスタアアアアアアアアー！！！！！！！！」

なのはは桃色の砲撃魔法のディバインバスターを放つがやはり避けられる。

「すばしっこい……！」

「宇宙船ですから、ここは射撃系魔法がいいかと」

星奈は冷静にそう言うとなのは、フェイトと一緒に無数の魔力弾を放ち宇宙船はそれをギリギリで避ける。

「スクロール砲、発射！」

スクロール砲が発射され同時にメビウムスラッシュが宇宙船に命中、

宇宙船は山の方に姿を消した。

「シエアッ！」

メビウスはそれを追い掛けたのだった。

「取り敢えずはこれで終わりかな？」

「後はみら……じゃなくて、メビウスに任せよう」

フェイトは間違って未来と言いつつになったが訂正、3人は地上に降りてバリアジャケットを解除した。

それからガッツウイングがやって来て宇宙船が墜落した辺りを飛ぶが宇宙船は無く完全に破壊されたと考えカイトとミズキを残して帰還した。

だが……

（未来が帰ってこない……どーしたんだアイツ？）

零斗は未来が帰ってこないのに不信に思い宇宙船が墜落した山へ向かおうとしたら。

「あ、零斗くん！」

そこで帰ろうとしていたなのは達と出会った。

「なのは……」

「どこに行こうとしているんですか？」

「ちよつと山の方にな」

「え？でもさつき宇宙船落ちたから危ないよ」

なのはと星奈に行くのを止めさせられるが。

（もしかして……そうだ、零斗もウルトラマンなら）

と思い念話で話し掛けてみた。

（聞こえる零斗？）

（フェイト？何で俺とお前が念話で会話できるの？）

（未来がメビウスって事知ってるよ）

（アイツ、喋ったのか……まあその方が動きやすいか）

零斗はそう考え会話を続ける。

（それで未来はどうしたの？）

（帰ってこないんだアイツ、アイツ真面目だから絶対寄り道なんかしないのに）

（確かに、未来は真面目だから絶対真っ直ぐ帰ってくるよね………
そしたら）

ここで念話を切り。

「そしたらなのは、星奈、誰かが零斗に付いていくのはどう？」
そう提案をすると。

「それなら……」

「問題ありませんね」

その提案を同意、誰が零斗に付いていくかで話し合った結果。

「それじゃ行こ、零斗くん」

「ああ」

なのはが一緒に行く事になり零斗と2人、宇宙船の墜落現場へ向かった。

フェイトと星奈は翠屋へ戻る、その途中で。

「フェイト」

「どうしたの星奈？」

「何か隠してませんか？」

「何かって何？」

「例えば……輝と風森が何なのかを？」

しばらく沈黙すると先に質問した星奈が。

「輝と風森がウルトラマンだと言う事を」

「証拠は？」

それを言われてもまだポーカーフェイスを突き通すフェイト。

「さっき貴女がメビウスの名前を言う前に未来と間違っって言いそうになった事、後、彼等から魔力とは違う別の力を感じると言う事」「別の力？」

「一応私達は闇の書から生まれたもの、魔力以外の異能力を感じるのも容易いです、これはアホな雷羽も感じられます」

そしてしばらくまた沈黙するとフェイトは深呼吸をする。

「星奈は勘が鋭いね、あの3人の中で特に」

「じゃないとやっていけません」

「確かこの辺りだよ」

零斗となのはは宇宙船の墜落現場に到着、そこには湖があり宇宙船の破片らしき破片は落ちていなかった。

「何もないな」

「GUTSじゃメビウスが破壊した事になってるからね」

「そうか……」

（アイツがそこまで追い討ちかける事ないから……多分どこかに宇宙船があるはずだ）

2人は湖の近くに寄ろうとしたら。

ピシャン！ピシャン！

「にゃ、にゃに！？」

突然湖の水面が光、水柱が立ったと思ったら。

「キシヤアアアアッ！！！！！！」
「か、怪獣！？」

頭には三日月型の黒いアンテナみたいな角が二本回っており手には二本の爪と長い尻尾で白いで至るところに黒い牛みたいな模様がある宇宙放電怪獣エレキングが現れた。

「エレキング？だけど違う……」

そう呟くとエレキングは2人を見つけ両手の指の穴から火炎放射を放つ。

「危ない！」

なのははすぐさまセットアップ、零斗の腕を掴んで飛んで火炎放射を避ける。

「危ねえ……」

「エレキングにあんな能力あったか？確か再生エレキングに火炎放射の能力が……」

「零斗くん、あの怪獣に詳しいね」

零斗はやべって表情になるとある物を発見した。

「なのは！森の中！」

「えっ？あ！」

森の中には壊れた宇宙船があった。

「何で見付からなかったの!？」

「多分透明になってステルスのなもんでも張ってたんだろ？」

「本当に詳しいね」

「あ、ああ……ってなのは、この状態どうにかしない？」

「え？ふええええええつ!!!!!!!!!!？」

この状態と言うのは空を飛んでいるためなのはが零斗を抱きしめて
いる状態だった。

「ってわっ!？」

なのはがバランスを崩して零斗が落ちそうになるが何とか腕を掴む。

「取り敢えず宇宙船の中に入ろう」

「零斗くんは下で待ってて」

「おいおい、俺をあんな化け物がいる所に待たせるのか？」

零斗は口から電撃光線、両手から火炎放射を放つエレキングを見て
そう言う。

「た、確かに……………」

渋々零斗を連れていく事にし、地上に降りるとエレキングは気付く。

「エレキングが!」

「じゃあね!」

零斗はベルトに付けていた箱を開き青いカプセルを取り出す。

「イケッ!ミクラス!」

青いカプセルを投げると投げた先でカプセルは光、そこに二本の大きな角でバッファローに似たカプセル怪獣ミクラスが召喚した。

「零斗くん！？」

ミクラスはエレキングを突進で吹き飛ばし戦い始める。

「ミクラスが足止めしてる間に入るぞ！」
「う、うん！」

2人は宇宙船の中に侵入した。

「零斗くん、あの怪獣は？」
「話は後でな」

2人は宇宙船の操縦室っぽい部屋に入った。

「ここが操縦室っぽいね」
「だな……っ！未来！」

そこの操縦席とは違う席に未来が縛り付けられていた。

「未来くん！」
「あ、零斗くん、なのはちゃん」

未来は苦笑いしながら2人の名前を呼んだ。

「ごめん、捕まっちゃった」

本当に未来は申し訳ない顔で誤り今にでも泣き出しそうだった。

「泣くなよ未来！お前が泣くと手が付けられないんだから！」

とか叫ぶと。

「あら、またお客さん？」

そこに可愛らしい少女が2人入ってきた。

「ピット星人！」

未来はその名前を叫ぶ。

「宇宙人なの！？」

なのはどこからどう見ても人間の少女なため驚きが隠せない。

「アハハハハハハ」

笑いだすと2人は異形な姿に変わり変身怪人ピット星人となる。

「本当バカよねー宇宙船の墜落で巻き込まれたと思って近付いてきて捕まっちゃうなんて男って可愛い女の子に弱いんだから」

「それは違うと思う、未来は誰にでも優しいから男と女関係無いと思う」

「それじゃ貴方はどうなの？」

それを言われ。

「俺は……」

零斗はチラってなのはを見る。

「俺も興味ないな……」

「もう！何なのよあんだ達は！」

ピット星人はキレて声を上げる。

「外にはいきなりミクラスが出るし！」

「こうなったら飛ばすわよ！」

ピット星人は宇宙船を起動するスイッチを押して宇宙船は飛び立つ。

「本当に飛ばしちゃったの！？」

宇宙船は本当に飛んでしまい脱出しようにも未来も居るため飛ぶ事もできない。

外ではミクラスとエレキングが激戦を繰り広げていた。

「グオオオオオ！」

「キイイイイ！」

ミクラスは得意の接近戦でエレキングを攻撃。

「キキイイイイ！」

エレキングはミクラスに長い尻尾を巻き付け放電攻撃を繰り返す。

「グギヤアアアアッ！！！！！！！！？」

「ミク拉斯、戻れ！」

零斗はミクラスをカプセルに戻し箱にしまう。

「もしかしてあんたウルトラセブン!？」

ピット星人は昔地球を守ったウルトラセブンの名前を口にするが。

「思い出さたくない名前言ってんじゃねーよ!!」

なぜか零斗はセブンの名前を聞いて不機嫌になる。

「俺はセブンでもないし……俺は！」

ポケットから何かのアイテムを出しそれを右に展開されメガネのよ
うな物になる。

「デュワッ！」

それを目に付けてスパークさせ頭から爪先にかけて姿が変わっていき青い光を発したのはと未来を連れて壁を突き破り外に出る。

「私達の宇宙船が！」

「ジュワッ！」

青い光は地上に降り頭に二本のブーメランに額に緑色のランプ、身体にはプロテクターが付いており真ん中にはカラータイマー、銀色のラインで赤と青に別れた身体のウルトラマン、ウルトラマンゼロが現れしゃがみ、なのはと未来を下に下ろした。

「零斗くんが………ウルトラマン………！」

エレキングはゼロに気付き三日月状の光線を連射する。

「ジュッ！」

ゼロはそれを両手を広げてウルトラゼロバリアーで弾き返す。

「ジュワッ！」

ゼロはエレキングに接近し腹部に連続パンチを喰らわせると次にアップーで顎に喰らわせて殴り上げる。

「デアアアッ………！」

落ちてくる時に回し蹴りを喰らわしエレキングは九の字に曲がりながら蹴り飛ばされる。

「すごい………」

「零斗くんはウルトラマンレオの下で修行してたから接近戦に強い

んだ」

ゼロはジャンプし回転するとエレキングの背中にかかと落としを喰らわせる。

「ちょっと！あのウルトラマン強すぎるわよ！！」

「こつちも攻撃するよ！」

宇宙船から光線が放たれ背中に喰らう。

「ジュツ！？」

その隙を付かれエレキングは尻尾でゼロを巻き上げ放電攻撃をする。

「ジュアアアアッ……………！」

「キイイイイ！……！」

エレキングは締め付けと電気の強さを高めていきゼロに更にダメージを与える。

「零斗くん！」

するとなのははレイジングハートを宇宙船に向けて。

「デイベイン……………バスタアアアアー……………！！！！！！！！！！！」

デイベインバスターを放って宇宙船を攻撃。

「今の何！？」

「さっきの魔導師か！しかもこんなに強い威力なんて……………魔王か

! ?

因みに話の内容は外に聞こえており。

「誰が魔王なのかな？」

「えっ？」

「な、なのはちゃん!？」

隣に居た未来はなのはの目を見てめちやくちや怯え、ゼロとエレキングもそれを見て怯えていた。

(.....!)

エレキングは恐怖のあまり拘束するのを止めゼロを解放した。

「もう一度……ディバイン……バスタアアアアッ！！！！！！」

最大出力でディバインバスターが放たれ宇宙船に直撃。

「ギアアアアアアアアツ!!!!!!」

宇宙船は木端微塵で爆発した。

（なのはが……ま、魔王……）

ゼロはめちやくちや震えていた。

「キイイイイイイイイイイ！！！！！！！！！！」

エレキングはこの空気に耐えなくなり光線や火炎放射を放つが当たらない。

「ジュッ！！！！」

ゼロは右手をカラータイマーに近付け左腕を拳にして後ろに引きビームランプから緑色の光線、エメリウム光線を発射しエレキングの角を破壊する。

「ダアアアアアアッ！！！！！！！！！」

ゼロは頭に付いているゼロスラッガーを投げ飛ばしエレキングの尻尾と頭を切り裂き、その傷口から血が流れエレキングは爆発し絶命した。

「とりあえず何とかなったか」

変身を解いて零斗の姿に戻る。

「零斗く〜ん」

「な、なのは！」

零斗はさっきのなのはを見て恐怖を覚えているため少しビククリした。

「何でビククリするの？」

「な、にやんでもありません！」

未来は今にでも泣きそうな目だった。

（怖かったよ）（泣）（

それから海鳴市で起きていた停電現象はエレキングが倒されて以来起きていない。

ウルトラマンマックス誕生！（前書き）

これはあまり変更点なし。

ウルトラマンマックス誕生！

「この前現れたウルトラマンの名前が決まったわ、レジストコードはウルトラマンゼロよ」

ダイブハンガーの指令室ではイルマがゼロの事を話していた。

「今回で2人もウルトラマンが！」

ヤズミは2人もウルトラマンが現れた事により興奮していた。

「テンションが上がる気持ちは解るけど落ち着けよヤズミ」

「あ、すみません」

シンジヨウに注意され謝るヤズミ。

「この2人が味方と言う事は确实だ、我々もウルトラマン達に負けないように努力しなければならない」

ムナカタがそう言うといルマ以外は「はい」と答え会議は終了、それぞれの仕事に取り掛かる。

数時間後、龍巖岳と言う場所にある火山が突如噴火したと通報がありGUTSはすぐに調査へ向かった。

「休火山だったはずなんやけどな」

ガッツウイング2号にムナカタ、ホリイ、シンジヨウ、ミズキが乗っており1号にはカイトが乗っていた。

「まあ自然現象だからな、いつ怒るか解らない、着陸して調査をするぞ」

二機は着陸しカイト達は機体から降り調査を開始。

「暑いわね……」

「火山が急に噴火したからな……暑いのは無理ないか」

カイトとミズキはペアを組み調査をしていた。

シンジヨウとホリイもペアを組みムナカタはガッツウイング2号で待機していた。

「そう言えば地元の住人の避難はどうなってるの？」

「それなら今は魔導師部隊が進めてるからすぐに終わるわよ」

龍蔵岳の麓には街がありそこは一般魔導師部隊が避難を進めていた。

「そうなんだ……あの子達は？」

「あの子達って……海鳴市の？」

「そう」

「あの子達は軍に入ってるけど入ってないみたいなものだから軍が協力の依頼をするか自分達から手伝ってくれるかのどちらかだから、何でも屋みたいな感じだからここには来てないわよ」

あの子達とはもちろんなのはとフェイト達の事である。

「まあ私達だけじゃ切り抜けないなら呼ぶかもしれないけど、ただ何で聞いたの？」

「いや、できる限りは俺達で解決しないとなってると思って、まだ高校生なのにこんな命を落としかねない現場に放り込むなんて」

カイトはあまりなのは達を戦わせたくないと言う考えから聞いた質問だった。

「そうよね……ウルトラマンにも言える事よね、私達だけじゃホントにどうにもならない時に、できるなら私達で怪獣を倒さない」と

ミズキも同意見だった。

「だね！」

その頃、天高では……

「未来、恋愛はね、男と女が互いを好きになって恋人になる事が恋愛なんだよ？」

「そうなんだあゝ」

ハヤテの教室ではフェイトが未来に一般常識を教えていた。

「フェイトちゃんと未来くん何してるの？」

そこに零斗となのはとヒナギクがやって来てハヤテとナギに話し掛ける。

「未来くんが常識をあまり理解してないとかでフェイトさんが一般常識を教えているところですよ」

「まったく……恋愛と言う言葉を知らなかったとは情けない」

「そう言うナギはどうなのよ？愛の告白と間違えたあの言葉の意味」
「む、昔の事を掘り返すな！」

ナギは顔を真っ赤にして怒った。

「ご、ごめんなさい」

自分が原因なためハヤテは謝る、理由は借金押し付けられた時にナギを拐おうとした際に『君が欲しいんだ』の言葉を愛の告白とナギは間違えたため。

「そんな事があったんだ、このチビスケ」
「な！」

零斗はさりげなく？ナギの悪口を言った。

「零斗くん、悪口言っちゃダメだよ？」

「だけどホントの事じゃねーか」

「それでもダメなの、解った？」

下から覗き込むようになのはは零斗を見上げて。

「解った……言わねーよ」

そう言った。

「次はスポーツの事を教えよっか？」

「はい！」

「フェイトと輝くん、何か親子みたいね」

「確かにな」

ナギとヒナギクは未来に何かを教えるフェイトの2人を親子みたいと言う、未来がちゃんと理解して答えられると頭をフェイトが撫でているところもあった。

「何か変わったようなのねーな」

「せやけど何かあるのは確かのようにやで」

シンジヨウとホリイはつり橋を渡っていたらホリイは下に何かの大きな足跡を見つけた。

「これは……！」

「怪獣の足跡かもしれへんな、この場所を記録しておいてウイングに戻ろう」

2人はこの足跡を報告、カイトとミズキも合流し機体に取り込みそれでその足跡を追った。

「足跡は火山の方に続いてるな」

「今回の怪獣は火炎系の怪獣か………厄介やな」

「何で厄介何ですか？」

カイトはどういう意味か解らず質問をする。

「炎の怪獣が現れるとなそれに対抗せんと冷凍怪獣が出てくる事があるんや、そしたらわいらは二体の怪獣を相手にせんとアカンのや」

カイトはホリイの説明を理解し「なるほど」と言っていると地上から突如土と砂煙が舞い上がった。

「なんだ！？」

すると地底から背中に赤いコアと長い首と長い尻尾に四足歩行の怪獣……溶岩怪獣グランゴンが姿を現した。

「ガオオオオオオッ！……！」

「グランゴン！？グランゴンや！溶岩怪獣グランゴン！」

グランゴンは過去に何度か現れた事があるためデータに残っていた。

「グランゴンが出たか……するとラゴラスも出る可能性あるな」

ラゴラスとは冷凍怪獣ラゴラス、グランゴンとは敵対関係の怪獣、ラゴラスも何度か現れた事がある、

その時には必ずグランゴンも出現していた。

「リーダー！」

「各機、グランゴンを攻撃、人里には近付かせるな！」

「……了解！……」

GUTSはグランゴンに対し攻撃を開始した。

ガッツウイングはニードルレーザーを連射しグランゴンを攻撃していく。

「喰らえ！」

カイトはガッツウイング1号の機動性を活かしグランゴンにギリギリまで接近してレーザーを当てる。

「カイト上手いじゃないの！」

「ウイング1号は速いし小回り効くからこつという戦い方が得意からな！」

「ウイング1号の機動力を活かすなんてな、入隊間もないパイロットが」

「我々も負けてられんぞ！」

ガッツウイング2号もレーザーでグランゴンの頭を攻撃していく。

「グゴオオオオオオッ！」

グランゴンは口から火球を放つが難なく避けられる。

「よし！」

避けると再び攻撃を開始する。

その頃風都湾沖合いでは……

漁師が船で風都湾から出て魚の漁に行こうとしていたら突然波が荒くなってきた。

「波が荒いな……」

船も大きく揺れ始めひっくり返りそうになるぐらいだった。

「うわっ！？ど、どうしたんだよ！？」

すると突然水柱が立ち。

「うわあああああ！！！！！！！！？」

船はそれで50m以上吹き上げ海面に激突して沈没した、そして海中から水柱を現した青く背鰭みたいな物がある怪獣、冷凍怪獣ラゴラスが現れ陸を目指した。

「ギャオオオオオッ！」

ラゴラスは雄叫びを上げながら歩く。

「リーダー！風都湾にラゴラス出現や！」

「解った、カイトとミズキは急いで風都湾に迎え」

「了解！！」

ムナカタは冷静に命令を出しカイトとミズキが乗ったガッツウイング1号は風都湾へ向かった。

「ホリイ、デキサスビームをいつでも射てるように準備しておいてくれ」

「了解！」

ホリイは後部座席のパソコンのキーボードに何かを起動させるための準備を始めた。

「シンジョウ、グランゴンはどこへ目指してる？」

「このまま進めば麓の町を通ってから風都へ目指しています」

「やはりラゴラスが出現したからか」

ガッツウイング2号はレーザーを発射し続けグランゴンの進行を食い止める。

風都へ向かったカイトとミズキはすぐに風都湾の海上に着きラゴラスを確認する。

「ラゴラス確認！」

そしてラゴラスへ攻撃を開始する。

「ガオオオオオッ！」

ラゴラスは口から青い冷凍光線を吐きガッツウイング1号を攻撃するが避けられる。

「カイト、ラゴラスの頭狙って攻撃して」
「了解！」

ミズキに言われた通りにラゴラスの頭を狙ってレーザー発射のトリガーを引く。

「ギャオオオオツ！？」

頭にはやはり効いているらしくラゴラスは苦しみの声を上げる。

「やっぱり効いてるみたい！」

「カイト！軍の魔導師部隊が到着したわよ！」

そこに軍の魔導師部隊が駆け付け砲撃魔法を放つ。

「一機じゃキツかったから助かる！」

カイトはラゴラスの頭に狙いを定めレーザーを発射する。

魔導師達もそれを見てラゴラスの頭に砲撃を放ち攻撃していく。

「よし！効いてる！」

ガッツウイング1号は急上昇し一気に急降下しながらラゴラスの頭を攻撃し海面すれすれで徐々に上昇し機体のバランスを取る。

龍巖岳では……

「シンジヨウ、冷凍メーサー発射！」

「冷凍メーサー、発射します！」

ガッツウイング2号の機首から冷凍メーサーと言つ冷凍光線を発射しグランゴンを凍らせる。

「ホリイ、デキサスビーム発射スタンバイ」

「待ってました！」

次に機首が展開し中からハイパーレールガンと呼ばれる砲門が現れ。

「デキサスビーム、発射！」

デキサスビームと呼ばれる強力な光線が発射されグランゴンに命中、グランゴンは倒された。

「よし！ラゴラスを迎撃に行くぞ！」

風都湾に視点を戻すとラゴラスはゆっくりだが陸地に近づいており軍の魔導師部隊は陸地からでも砲撃が届く距離だった。

「ギャオオオオツ！」

「「「うわあああああつ！！！！？」」「」」

ラゴラスは冷凍光線を港に向かって発射し魔導師達はその爆発に吹き飛ばされる。

「大丈夫か！？」

「しっかりしろ！」

死人は出ていないものの重傷者が多く戦える状況ではなかった。

「ミズキ、俺達がラゴラスの注意を引き付けよう!」
「オッケー!」

カイトはラゴラスの注意を引くためにガッツウイング1号をラゴラスの真っ正面を飛ぶ。

「ガオオオオッ!!!!!!」

ラゴラスは冷凍光線を乱射する。

「うわっ!?!」

後ろから狙ってくるためギリギリの所で避けるが限界があった。

「きゃっ!?!」

光線は左の翼に当たり、ガッツウイング1号は墜落し始める。

「脱出しよう!」

脱出レバーを引くが脱出したのはミズキだけだった。

「カイト!」

ミズキは大声でカイトの名前を叫ぶがガッツウイング1号はだんだんと高度が落ちていく。

「脱出できない!?」

脱出装置は後部座席のだけが作動し操縦席の装置は作動しなかった、翼が破壊された際の衝撃で故障してしまったのだ。

ラゴラスは重傷を負っている魔導師達が居る港を目指し歩く。

「こうなれば!」

カイトは重い操縦桿を動かしラゴラスの方に向け生きているレーザーの発射機能を使いレーザーでラゴラスの注意を引く。

「カイト!水面に着水させて!」

通信機で呼び掛けるが聞こえているのにも関わらずカイトは攻撃する、怪我して身動きができない人達のために。

「うおおおおおつ!!!!!!」

ガッツウイング1号はラゴラスの真つ正面を飛びレーザーを発射しまくるとラゴラスはそれに目掛けて冷凍光線は発射する。

「カイト!」

冷凍光線が当たりそうになったその時、機体を赤い光が一瞬包みコックピットからカイトは消え、冷凍光線は機体を撃ち抜き、ガッツウイング1号は爆発した。

「そんな……!」

そこにガッツウイング2号が到着する。

「間に合わなかったのかよ!!」

シンジウは悔しさのあまり声を上げる。

「カイトの犠牲を無駄にしないためにラゴラスを倒すぞ!」

ムナカタは悔しさを表に出ささずにそう指示し攻撃を開始する。

カ
.....

カイ
.....

「カイト」

「ここは……………」

カイトは光輝く空間の中で目を覚ますと。

「気が付いたか」

「君は……………」

目の前には赤く銀色が流れる身体で胸には銀色のプロテクターをし
金色のラインが六つに真ん中には青く輝くパワータイマー、
目はオレンジ色に輝いており左腕にはメビウスブレスに似ているが
形がプロテクターに似ている金色のアイテム、マックススパークを
付けた巨人が居た。

「ウル……………トラマン？」

「そうだ、私はM78星雲から地球を守るためにやって来たウルト
ラマン、ウルトラマンマックスだ」

「ウルトラマンマックス」

「君の自らを犠牲にし誰かを守ろうとした戦う勇氣に共振する個性
を感じた、君に力を与えたい」

「力を……………」

「これを使え」

マックスはその場から消えるとマックススパークだけが残りカイト
はそれを取り握りしめると光に包まれた。

「なんだ!？」

ラゴラスの目の前に光輝く柱が現れ、光が消えるとそこにはカイトが変身したウルトラマンマックスが現れた!

「新しい光の巨人……!？」

ムナカタは静かに呟くとマックスは素早くラゴラスに接近し腹部にキックを繰り出し蹴り飛ばす。

「デュアッ!」

そしてまた素早く移動し立ち上がったラゴラスにエルボーを喰らわずとラゴラスは口から唾液を吐く。

「ディアッ!」

「ガオオオオオッ!？」

マックスは腹部に連続パンチを繰り出しラゴラスを追いつめていく。

「うおおおおお………!デュワッ!……!」

ラゴラスを持ち上げ遠くへ投げ飛ばした。

「ガアアアアッ!……!……!」

ラゴラスは口から冷凍光線を発射するが。

「シュワッ!」

マックスは頭に付いているマクシウムソードを投げ冷凍光線を受け止める。

「デユワッ！！！！！！」

そしてマックススパークが付いた左腕を高く上げ光エネルギーを貯めていきそして腕をL字に組み必殺技マクシウムカノンを発射、光線はラゴラスに命中、ラゴラスは粉々に吹き飛び倒されマックスは両手を広げ空へ飛んでいった。

「ウルトラマンが怪獣を倒した……だけどカイトは………」

気持ちが生んでいると。

「リーダー！シンジョウ！あれ！！」

ホリイは海面に浮かぶ何かを見つけた。

それは港にいたミズキも見つけた。

「カイト！」

それは海に浮かぶピンピンしているカイトだった。

ガッツウイング2号は着水しカイトとミズキを乗せダイブハンガーへと帰還したのだった。

青・春・変・身（前書き）

完成したお！

やっぱ未来はオーズにします。

青・春・変・身

「遅刻だ〜！」

とある朝、げんたは朝を寝過ごし自転車を漕いでいた。

「目覚ましなんで鳴らねーんだよ！」

目覚まし時計が鳴らなかったらしい。

余談だが時間はセットしたが鳴るようにスイッチを押さなかったのが原因。

「あれ？げんちゃん！」

「おおこなた！」

隣に自転車に乗ったこなたがやってきた、どうやら遅刻のようだ。

「げんちゃんも？」

「こなたもか？」

げんたは常人じゃ普通あり得ないぐらいのスピードを出しているがこなたは運動神経抜群なためその速度に着いてきている。

「昔から変わらねーなお前！」

「げんちゃんもね！」

すると隣を走り去るバイクが一台。

「やばっ！遅刻だ遅刻だ〜！」

「「ちよつと城先生も遅刻って、アンタ教師でしょ!？」」

バイクに乗っているのは城茂という実技の自動車整備の授業を担当している男だ。

「お先に!」

「バイクズルいよ」

げんたはいいなあという目で見ていた、天高の門が見えてきたが。

「茂、泉、水月、アウトだ」

門は閉まっておりそこに立っていたのは科学担当の風見志郎だった。

「そりやないっすよ、風見先輩」

茂はバイクを止めると続いて二人も自転車を止め息を調える。

「いや、アウトだ、後で本郷先輩にきつちりと説教を受けてもら
うぞ茂」

茂は「はい」としぶしぶ答える、本郷とは本郷猛、同じく科学担当の教師。

「君達二人はこれに名前と学年と組を書いて入るんだ」

生徒には至って優しい風見先生。

「すみません今日も」

「もう馴れた」

軽く会話をするとこなたとげんたは校内に入っ
ていき茂も続こうとしたら首根っこ引っ張られた。

「こなたアンタまた遅刻なの？」

「ごめん」

教室に入るとそこに待っていたのは紫の長い髪
の毛でツインテールの女子生徒柊かがみ、
因みに隣のクラスの生徒。

「こなちゃん今日も自転車？」

次に話し掛けたのはかがみに似た女子生徒だが
ショートヘアの柊つかさ、かがみの双子の妹である。

「お疲れ様です泉さん」

最後にピンクで長い髪の毛でメガネを掛けた
高良みゆきが口を開いた。

「いやいや、今日も朝からいい汗かいた……
てかなんで遅刻したのにまだHR始まってないの？」

そう、遅刻したのにも関わらずホームルームは
始まっておらず面白い話している生徒が多かった。

「黒井先生とひかる先生、遅刻みたいなの」

桜庭ひかる、かがみのクラスの担任で教師での遅刻常習犯である、
ななこと茂も常習犯でこの三人はその事があるからなのか、仲が良
い。

「あたしそろそろ戻るね、風見先生と本郷先生の説教が終わった頃
だと思うし」

主に教師の遅刻指導は風見と本郷らがやっており長いに有名、かが
みは自分の教室へ戻った。

「げんちゃん、そろそろ黒井先生来るよ？」

げんたは先ほどの全力疾走で疲れたのか、うつ伏せになってぐった
りしていた。

「まったく、遅刻するといつもこうなんだからもう」

「こなちゃん、げんたくんのお母さんみたいだね」

「世話が焼ける子が二人もいて大変だよ、ねーけんご？」

後ろの席に座っているけんごに話を振るうと後ろを向いてしまう。

「ほらね」

そしてななこがやってきてホームルームが始まるが起きないげんた
は出席簿チヨップを食らい起きる事になったのは言うまでもない。

それから時間が経ち昼休み。

「めし、めし、めし……っ」と

げんたは食堂に訪れ適当に椅子に座るが。

「げんちゃんダメだよそこ座っちゃ！」

こなたがやってきてげんたをその場から立たせようとする。

「なんでだよー！」

「げんちゃんは初めて食堂使うから知らないと思うけどね！」

生徒のほとんどは教室、又はそこの売店で買い屋上や中庭で食事するものも、だが食堂ではグループに別れてテーブルを使っている。

「そんなルール聞いた事ねーよ！」

げんたは断固として退こうとはしなかったが。

「そこに居るトラッシュ、退くんだ」

するとげんたが座る席を使うグループが、そこはアメフト部の部長とチア部の部長が座る席である。

アメフト部の部長の名前は上文字はやと、チア部の部長の名前は城風みづ、二人共げんた達一年上の先輩である。

「トラッシュ？」

「貴方の事よ」

みうがそう言いげんたは自分の事だと気付くがこなたもトラッシュの意味が分かっていなかった。

「ギークも居るみたいね」

ギークはこなたの事みたいでやはり意味は分かっていないが。

「トラッシュはゴミという意味でギークはマニアックとかそう言う意味ですよ」

そこにみゆきが突然現れ二つの言葉の意味を説明。

「ゴミだと!？」

それには怒り立ち上がり。

「ゴミはゴミ箱にな」

はやとは回りを付き纏っていた部員に目で合図をすると二人の部員はげんたを持ち上げ。

「な、何するんだよ!」

ゴミ箱がある方へ投げ飛ばした、今から始まる喧嘩をショーとして見る生徒達。

げんたはキレアメフト部の部員達の喧嘩を買い殴りかかった。

「水月さん、やり過ぎはほどほどに」

止める気さらさらないみゆきさん、こなたは心配そうに見ていた。多人数に一人だがげんたは互角な戦いを見せており回りは感心していた。

「結構やるじゃないか」

またまたはやとは部員に目で合図、なんと部員達はこなたとみゆきを背後から腕を掴み。

「お前それ汚いぞ！」

はやとは完全に二人を返して欲しければ大人しくしろと言おうとしていたみたいだが。

「おりゃー！」

部員二人はこなたに軽くあしらわれた、なぜならばこなたは空手とか習っていたからである。

「この程度雑魚い雑魚い」

はやとは啞然とし口を開けていた。

「そうだあいつ、空手習ってて運動神経抜群なんだゆな」

げんたも今ごろ思い出した。

「ありがとうございます、泉さん」

「いやいや、げんちゃん！そんな奴ら軽く一捻りしちゃって！」

「おう！」と答え喧嘩は続行、するかと思いきや。

「やめなさい」その一声で生徒達は静まりげんたも回りの流れに任せて静かになる。

『生徒会長！』生徒の視線の先にはヒナギクとナギ、ハヤテが居た。

「あら、生徒会長今日は食堂でお食事？」

「そうですよ、城風先輩」

ヒナギクとみうは険悪な雰囲気、理由はこの学校ではクイーンというものを決めており年に一回はクイーンコンテストという大会行われており生徒を盛り上げている。

去年度の優勝者はみうだが今年は一年にして生徒会長に立候補し見事当選したヒナギクが居りどちらが優勝するかが分からない状態だった。

「クイーンとかには興味はありませんが勝負ごとなので真剣にやらせて頂きます」

「それはそれは、いいわ、受けて立つわ」

二人の間にバチバチと火花が散る音が鳴る、だがそんな雰囲気をぶち壊すともない奴等が現れた！

「フェイトちゃん、ここが食堂？」

「そうだよ未来」

未来とフェイトがやってきて堂々と学校のクイーンとキング（はやと）が座るテーブル席に、部員達は退かそうとしたが。

「何ですか？未来が先に座ったんですよ？クイーンもキングも関係

ありませんが何か？」

魔導士姿になってやるならかかってこいよこの野郎状態に。

「やるからには切り殺される覚悟で来て下さい」

バルディッシュを構え、まるで死神のようだった、部員は怯え大人しくフェイトに従った。

「フェイトちゃん、お腹空いた」

「待っててね未来、すぐにお母さんがお昼買ってきてあげるからね！」

フェイトは急いで売店へ向かった、並んでいた生徒達は大人しくフェイトに前を譲っていた。

「お母さんって……まあいいわ、行きましょ」

みうが去るとはやとアメフト部はそれに着いていった。

「フェイト怖ッ！」

こなたはシェーッてしながら言っていた。

「この学校の生徒共はこの上文字をなんだと思っているんだ」

とかみうと別れてグチグチと部員達に愚痴を溢していると。

「なんだアレは？」

するとゴツく、身体にオリオン座を思わせるような点が並んでいる怪人、オリオン・ゾディアーツが現れた。

『うわあああああつ！！！！！！？』

オリオン・ゾディアーツは襲い掛かりはやと達は逃げ出す。

「なんだよアレ！？」

昼食を終えこなたに校内の案内をしてもらっている所で遭遇。

「ゾディアーツ……」

こなたはその怪人を知っているかのように呟くとげんたオリオン・ゾディアーツがはやと達を狙っているのが分かり落ちていた鉄パイプを持ち。

「ちよつとげんちゃん何するつもり！？」

「嫌な奴等だけど俺とダチになる奴等だ、見過ごすわけにはいかなーだろ！」

げんたは鉄パイプで殴るがオリオン・ゾディアーツの身体は硬く、弾き返されるが何度も殴るのだが鉄パイプを奪われ拳げ句折り曲げられ腕を振るっただけで吹き飛ばされてしまった。

「コイツ……！」

オリオン・ゾディアーツははやと達を追い掛けようとしたその時。
【Complete】という電子音が三重に響き。

『ハアアアアアッ！！！！』

オリオン・ゾディアーツの前に三人の仮面の戦士が現れた。

「ファイズ……！それにカイザとデルタ！」

「仮面……ライダー……！」

の字を模した仮面に黄色く輝く眼に胸部のプロテクターに流れるラインも、のように見え、身体に赤いライン、フォトンストリームが流れた仮面ライダーファイズ、

を模した仮面に紫に輝く眼、黒い身体に胸部がクロスするように黄色く輝くフォトンストリームが流れる仮面ライダーカイザ、
を模した仮面にオレンジの眼、黒い身体に白いフォトンストリームが流れる仮面ライダーデルタが現れオリオン・ゾディアーツと戦い始める。

「なんで仮面ライダーが………」

「この学校の七不思議で仮面ライダーが守ってるって伝説があるの………」

オリオン・ゾディアーツは負けると感じ撤退、ファイズ達はそれを追い掛けその場から去った。

「こなた！ゾディアーツは？」

そこにけんごが現れこなたに問う。

「ファイズ達が現れて逃げたよ」

けんごは「そうか」と呟くと。

「なあアレの事、何か知ってるのか？」

「君には関係ない」

その言葉を返すとけんごはその場から去りとある場所へこなたと共に向かった。

「ん？」

二人が校舎に入り向かった先は物置部屋でその中に入ったのを見るとげんたも入るが二人は居らず、不自然なのか自然なのか分からないロッカーが並べて置かれておりそれを一つ一つ開けて中を調べていると最後の一つ、壁ぎわのロッカーを開くと中には掃除用具ではなく光輝く空間に繋がっていた。

「なんだこれ！？」

空間は通路みたく広がっておりげんたはその空間に足を踏み入れた、好奇心に身を任せて。

その通路の先には光の空間ではなく何か秘密基地のような設備が整った部屋がありそこにこなた、つかさ、かがみ、みゆき、けんごが居た。

「まさかアンタが言ったゾディアーツが本当に現れるなんてね」

「近い内に現れると思っていたがこんなに早く現れるとはな」

けんごはパソコンに向かって話ながら何かの作業をしつつデスクに置いてある何か色とりどりのスイッチが四つ付いており真ん中にモニターのような物が付いた道具がケーブルに繋がれていた。

「フォーゼの力を使う時が来たかもしれない」

「それはダメ！」と四人は同時に言った。

「アンタ、体弱いのに変身したらどうなるかわかってるの!？」

けんごは体が弱く『フォーゼ』なる力が危険なためもし使ったらどうなるかわからないのだ。

「フォーゼは私かがみかみゆきさんが変身すれば!」

候補者として運動神経が抜群なこなた、運動神経、学力どちらとも平均値ながみ、運動神経と学力ともどちらとも平均以上なみゆきが居た。

「君達をそこまで巻き込むわけにはいかない」

だがけんごはこれ以上自分やゾディアーツに関わらせるわけにはいかないためその事を拒んでいると。

「うわぁーなんだこころ？」

「げんちゃん!？」

げんたが部屋の中に居り宙に浮かんでいた、まるで無重力の中に居るみたいに、けんごはため息を吐いて何かのレバーを下ろすとげんたは床に落ちる。

「痛えー！」

「君、まさか着いてきたんじゃない？」

「そうだぜ、なんせダチだからな」

「君と友達になった覚えはないのだが？」

平行線な会話を繰り返していると。

「あれを使えばいいんだな？」

けんごが見ていた道具、フォーゼドライバーに指を差して言う、どうやら最後の方の会話を聞いていたようだ。

「君にアレは使いこなせない」

だが渡す気はないらしくフォーゼドライバーからケーブルを外し持とうとしたが先にげんたに取られてしまい。

「やってみなくちゃわからねーぜ？」

「待て！」

げんたはフォーゼドライバーを持ったまま部屋から出て物置部屋に戻ってしまい追い掛けようとしたら躓いて転んでしまった。

「げんちゃん、私は私が追うからかがみ達はけんご見てて！」

こなたはげんたを追い部屋から出るとつかさが「私も!」と一緒に出ていった。

「俺がこんな体じゃなければ……………」

けんごは悔しそうに呟いていた。

そして校内に戻るとファイズ達を振り切ったオリオン・ゾディアーツが生徒達に襲い掛かり破壊の限りを尽くしていた。

ファイズ達はなぜ追えなくなったという邪魔が入ったのだ、ゾディアーツを従わせる組織の者達に行く手を阻まれていた。

「よし」

げんたはオリオン・ゾディアーツの前に立つが。

「やばっ……………この使い方聞くの忘れてた!」

使い方がわからずどうすればいいかあたふたしていると。

「げんちゃん!それを腰に着けて!」

こなたとつかさがやってきて使い方を指示するとげんたはフォーゼドライバーを腰に着けるとベルトのようになる。

「その四つのスイッチを右から押してっ!」

言われた通りにオレンジ、青、黄色、黒のスイッチを押していくと
【3・・・2・・・1】と鳴り響いていき。

「そして右のレバーを引いて変身！って言って右腕挙げて」

ポーズまで指示をするとげんたはレバーを引いて「変身！」と言い
右腕を挙げると丸いリングが現れ上昇していくとげんたの姿は白を
基準にし頭が Rocket みたいな仮面で赤い眼をした姿に変わる。

「あれがフォーゼ！」

「うむ、宇宙のエネルギー、コスミックエナジーを使い戦う仮面の
戦士、仮面ライダーフォーゼだよ！」

げんたは宇宙空間に存在する未知のエネルギーが詰まったフォーゼ
ドライバーに装填されているアストロスイッチ、オレンジの Rocket
トスイッチ、青のランチャースイッチ、黄色のドリルスイッチ、黒
のリーダースイッチ、
それらに詰まったコスミックエナジーで変身する仮面ライダーフォー
ーゼに変身したのだ。

「なんか知らないけど……………宇宙キター！」

両腕を挙げて叫ぶとフォーゼはオリオン・ゾディアーツに戦いを挑
む。

「タイマンはらせてもらっぜ！」

オリオン・ゾディアーツに指を差して言うてから殴り校舎の外へ出
る。

「おらあああつ！」

外に出て回りを気にしなくてもいい事に豪快に蹴りやパンチを打ち込んでいく。

「こりゃいいや！」

「げんちゃん！スイッチ使って！」

「スイッチ？」

試しに一番右のオレンジのロケットスイッチを使ってみた。

【ロ・ケツ・ト・オン】と鳴り響き右腕にオレンジのロケットのよ
うなロケットモジュールが現れ後部の噴射口から火が吹きいきなり
のため勢いに流されフォーゼはくるくる足を軸にし回る。

「目が回る〜！」

オリオン・ゾディアーツは回っているフォーゼに攻撃しようと接近
したが迂闊だった。

フォーゼはその状態でオリオン・ゾディアーツをパンチし殴り飛ば
しようやくバランスを取れるようになり回転しなくなり走りだして
パンチを繰り返して殴る。

「ようやくなれてきたぜ……………」

「飛んでから黄色のスイッチを押してライダーキックで倒して！」

フォーゼはロケットモジュールで空を高く飛び左から二番目のドリ
ルスイッチを押し【ド・リ・ル・オン】と鳴り左足に黄色いドリル
モジュールというのが現れると左足をオリオン・ゾディアーツに向
け突貫する。

「レバーを引いて！」

こなたが叫びフォーゼドライバーのレバー、エンターレバーを引くと【ロ・ケツ・ト・ド・リ・ル・リミット・ブレイク】と鳴り響き。

「ライダーロケットドリルキイイイイーック!!!!!!!!!!!!!!」

勝手に必殺技の名前を命名して叫びフォーゼ^{II}げんた命名ライダー
ロケットドリルキックがオリオン・ゾディアーツを貫き。

「あつち」

ドリルは地面に刺さりフォーゼはそれで回るが何とか止まり、オリオン・ゾディアーツを背にする。

オリオン・ゾディアーツは火花を散らしながら倒れ爆発した。

「やったー！」とこなたとつかさが両手を挙げて跳ねて喜ぶとフオーゼはロケット、ドリルのスイッチをオフにしモジュールは消えた。

「いんもんさ!」

「貴様ああーっ！」

そこにようやく体調がよくなつたけんことがみとみゆきが走つてきた。

「ようけんご、あの怪物倒してやったぜ」

「まだだ、スイッチをオフにしない限りあのゾディアーツは現れるぞ」

「スイッチ？」と言うとけんごはフォーゼドライバーのスイッチをオフにしていきエンターレバーを引くと変身が解けげたの姿に戻ってしまった。

「これは返してもらっぞ」

けんごはフォーゼドライバーを持ちその場を去った。

「スイッチ？」

「ゾディアーツは倒してからそのゾディアーツに変身するためのアストロスイッチをオフにしないと完全には倒せないんです」

みゆきがゾディアーツの倒し方について説明する。

ゾディアーツが現れた騒ぎにより午後の授業は中止となり下校する事になった。

「どうするか……………」

その後の事だった、オリオン・ゾディアーツが暴れた事により被害は現在では使われていない旧校舎にまで被害が及んでおりその中にある棺桶みたいものが蓋が開いた状態で開いてありそこに赤い右腕

が箱みたいな物を持って浮かんでいた。

「使えるバカでも探してオーズに変身させてメダル稼ぐか……」

そう喋っていると旧校舎に入ってくる一人の生徒が。

「あれえ、ここから何か感じたんだけど気のせいかなあ？」

そこにやってきたのは未来で何か未知のエネルギーを感じたらしく一人で調べに来たのだ。

「ちょうどいい、アレに取り付いてメダル稼ぐか」

赤い腕は未来の方へ向かって飛んでいく。
未来も気付くが遅く。

「お前の体、使わせてもらっぞ」

「うわあああああつ!!!!!!!!!!?」

「未来!？」

未来に何かあったとお母さんリーダーが反応したフエイトが居たとか。

青・春・変・身（後書き）

因みに三部構成です今回は。

フォーゼ オーズ フォーゼ& オーズですかね？
その内アंकは新しい体見つけるかも……

次回【メダルと未来と謎の腕】

メダルと未来と謎の腕（前書き）

連続登校、今回は少しお色気がWWW

メダルと未来と謎の腕

「未来!？」

前回、未来が未知のエネルギーを感じ旧校舎へ向かい謎の腕に襲われ、

フェイトは未来と一緒に帰るために校門の前で待っていた。

「行ってみるか……」

心配になり校内に入ろうとしたら。

「あ、み……らい？」

未来がやってきたのだが少し感じが違った。

金髪になっていたのだ、未来の髪の色は茶髪なはず、だがこんなにすぐに髪を染める事なんてできないはず。

「おい、未来ー」

と腕を振って呼ぶが未来は無視して校内から出てしまった。

「未来？ちょっと待ってよ未来！」

「……………」

だが振り向かず歩いていき後ろから後を着いていく。

「なんで無視するの？ねえ？」

すると止まり。

「さっきから何だよ！？鬱陶しいなあ！」

突然未来は後ろを振り向いて怒鳴り鋭い目付きで睨む。

「お前……未来じゃないな」

フェイトも負けじと鋭い目付きで睨む。

「お前、魔導師か？」

「そうだ」とフェイトは未来を睨みながらバルディッシュを起動させる。

「一体誰だ？何を目的で未来を？」

「目的？目的、そ」ハアアアアアッ！！！！！！「うおわっ！？」

言う前にフェイトは問答無用で斬り掛かった。

「人の話は最後m」問答無用おーっ！」「わおっ！？」

避けようとしたら右腕を掴まれ。

「掴まえた！大人しく未来をかえ……………せ？」

だが掴んでいたのは旧校舎で未来を襲った赤い腕で、未来本人は倒れていた。

「未来いいいいいいいいいつ!!!!!!!!!!!!!!」

赤い腕を放り投げフェイトは未来を抱き起こす。

「大丈夫！？ねえ大丈夫未来！？」

泣きながら問い掛けている次第に目を覚まし意識が覚醒する。

「未来……良かったあーっ！」

「フェイトちゃん！？」

むぎゅーと未来を抱き締め無事だということを喜ぶと。

「痛えな！何すんだよ女！」

「貴様こそ、よくも未来を……………！」

異様な殺気を放ち赤い腕だけどころか未来まで怯えうるうるした目になってしまう。

「あ、ごめんね未来」

よしよしと幼子を宥めるかのように頭を撫でる。

「それで貴様、何者だ？」

赤い腕に対しては睨み。

「俺の名前はアंक、見ての通り人間じゃない」「よくも未来を……………ゆるさん！」人の話は最後まで「問答無用！」聞けよおい！」

フェイトは赤い腕アंकに斬り掛かろうとしたら。

「フェイトちゃん、話は最後まで聞いてあげようよ」

そう言われるとフェイトはニコニコしながら同意しアंकの話聞くために負け犬公園という天学の近くにある公園へ。

その頃、天学の理事長室では……

「とうとうグリードが復活したか……ハッピーバースデー！」

部屋にはオレンジの派手なスーツを着た男性が泡立て器を使い生クリームを作っていた。

「ゾディアーツの騒ぎで旧校舎からグリードが復活したようだね後藤くん！」

「はい、ライドベンダー隊からの報告でオリオン・ゾディアーツは力を確かめるべく旧校舎の内部を破壊したようです、鴻上理事長」

派手なスーツの男の名は鴻上光生、この天学の理事長である、鴻上に話し掛けた男の名は後藤進、この天学の高校二年であり鴻上から強い信頼を得ておりライドベンダー隊なる部隊の隊長をしている。

「そしてグリードと同時に復活するのが……オーズ、オーズの適応者がすぐに見つかるのを祈るうではないか！」

鴻上は生クリームをスポンジケーキに塗っていきデコレーションしていく。

「後藤くん、引き続きグリードのアंकの監視を、誰がグリードになるか見届けてくれたまえ」

「わかりました」

進は部屋から出ていくと鴻上は隣の部屋へ入るためのドアを開け中に入っていた。

「俺はグリードって欲望の塊、セルメダルと欲望が濃いコアメダルでできたお前達から見れば化け物だ」

アंकは銀色のセルメダルと枠が金で平面に鷹の絵が描かれ赤いコアメダル、タカメダルを出して説明。

「このセルメダルを人間に投げ入れれば欲望の塊の化け物、ヤミーが生まれその人間の欲望のまま動く」

「なら君もヤミーができるの？」

「いや」と否定。

「俺はコアが少なくてヤミーを生む力もなくこの右腕動かすのがやつとだ」

「なら今この場で！」

フェイトは未来の仇と言わんばかりにバルディッシュで斬ろうとするが止められ落ち着きを取り戻す。

「僕の体をどうするつもりだったの？」

「あ？他のグリードからメダルぶん取って稼ぐつもりだったんだよ」

他のグリードというのに二人は驚いた、アंक以外にも居ると思わなかったからだ。

「そろそろ動きだしているだろうな」

アंकは回りを見るように腕を動かしていると悲鳴や爆音が聞こえ道路を見るとそこには人型だが明らかに人間ではなく、腕がカマキリのような鎌となり体が緑色のカマキリヤミーが車等を破壊していた。

「アレがヤミーだ、コイツはウヴァのだな」

「見つけたぞアंक！メダルを返してもらおうか！」

「嫌だな、返して欲しければコイツ倒してからしろ」

「私！？」

フェイトに指を差して言うとかマキリヤミーは襲い掛かる、バルディッシュで鎌攻撃を受け止めると魔導師姿に。

「勝手な事を……！」

「人を守るのが魔導師なんだろ？回りを見てみる」

回りはカマキリヤミーにより怪我をした人々が居り倒れているのも居た。

「言われなくなつて！」

フェイトはカマキリヤミーと戦い始めるとアंकは細長い四角い箱みたいなオーズドライバーという物を未来のブレザーから出す、乗っとなっていた時にポケット等に入れておいたみたいだ。

「これを腰に着ける」

未来は戸惑いながらも腰に装着、するとベルトみたいになり右側に丸いオースキヤナーと左側にはメダルを収納するオーメダルネストが付いていた。

「この三つのメダルをここに右から赤、黄色、緑と入れていけ」

オードライバーのバックルの三つのくぼみにタカメダル、黄色で虎の絵が描かれたトラメダル、緑で飛蝗の絵が描かれたバッタメダルを右から入れていくとバックルは傾く。

その行いに気付いたカマキリヤミーは。

「おいやめろ！アंकに乘せられるな！大変な事になるぞ！うわおう！？」

親切に止めようとするがフェイトに斬り掛かれそれどころではなかった。

「コイツをスライドさせろ」

オースキヤナーを渡すと未来の目付きは変わりオースキヤナーでバックルをスライドさせコアメダルを読み込ませていく。

「変身！」と思わず叫ぶと【タカ！トラ！バッタ】とコアメダルの

種類の名前が響き【タットツバ！タトバ！タットツバ！】と何か歌のようなものが流れ未来の姿は変わる。

黒いスーツを基準に赤くタカのように緑色の眼の仮面タカヘッドに胸部にはオーラングサークルというメダルのような鎧に上からタカ、トラ、バッタと読み込んだコアメダルの絵となっており腕は黄色いトラアーム、脚には緑色のラインが流れたバッタレッグとなった、仮面ライダーオーズ・タトバコンボに変身した。

「仮面ライダー！？」

「あゝ……！」

フェイトは驚くがカマキリヤミーは残念そうに嘆く。

「え？今の……タカ、トラ、バッタって歌が」

「歌は気にするな、それはオーズ、どんなものかは……戦ってみればわかる」

オーズは「よし」と気合いを入れると走りだしカマキリヤミーにパンチを食らわした。

「スゴい！スゴいよこのオーズって言うの！」

「どうなっても知らないぞ！」

カマキリヤミーは鎌で斬り掛かるがバッタレッグが飛蝗のような脚に変化しジャンプして後ろへ避けるとトラアームからトラクローという爪が飛び出しバッタレッグの力を使ってジャンプしカマキリヤミーに切り掛かる。

「セイヤーッ！」

「ぬあっ！？」

体を切り裂かれ火花を散らすと同時にセルメダルも飛び散る。

「この怪人メダルでできてるのか……」

「コイツ……人が親切にしてやってるのに……もう知らないぞ！」

カマキリヤミーは完全に怒り鎌でオーズを斬りダメージを与え吹き飛ばす。

「うわぁーっ!?!」

「未来! 貴様!」

オーズが傷付いた事に怒り、カマキリヤミーに斬り掛かったが。

「もう貴様の動きは見切った!」と叫び鎌を振るい斬撃をフェイトに食らわす!

「フェイトちゃん!」

仮面の下、目を瞑る、頭に血塗れのフェイトが浮かび恐る恐る目を開くと。

「アレ?」

血は飛び散っておらず代わりにバリアジャケットの切れ端が散らばっていた。

「いや〜ん」

「おかしいな……バリアジャケットは貫通したはずなのだが……」

突き刺すように切り裂くとカマキリヤミィは断末魔を上げて爆発、セルメダルが数枚散らばる。

「ふう〜」

オーズは道路に着地するとバックルを水平に戻すと変身が解ける。

「なんか使い方わかつちやった」

フォーゼとは違いオーズドライバーが変身者の脳に直接使い方を教えるようだ。

「お疲れ様、大丈夫だった？」

戦いが終わった事により学生服に戻り駆け寄るフェイト。

「あれ？アंकは？」

さっきまでいたと思われていたアंकは居らずすると倒れていた一人の天学の制服を着た焦げ茶色の髪の毛で八重歯の男が立ち上がる、だがその男は微かに口を動かしていた。

「まさか……………今度はその人に！？」

二人はすぐに理解できた、倒れ気を失った人間に乗り移ったと。

「この人間は死にかけていた、別にいいだろ」

アंकが乗り移った男は右側の髪の毛の部分が金髪となった。

「さて、長居は無用だ、すぐに行くぞ」

アंकは堂々とその体を使いその場を去るために歩いていく、未来とフェイトはその後を追っていった。

さっき、アंकが乗り移った男が口を動かし聞こえないように呟いた言葉は二つの名前だった。

「みさお……………あやの……………」と呟いていた。

メダルと未来と謎の腕（後書き）

はい、やっちゃいました、ニヤニヤが…… フェイトが悪いんだ、あんな色気ぶつまけてるバリアジャケットを着てるからこうなるんだよ……

因みにフェイトにはウェイと言ってもらおうかと。

因みにオーズのタトバ以外の持ちメダルはウナギとチーターです。

鴻上さんが理事長で後藤さんは高校二年wwww

次回【天然とヤンキーと宇・宙・上・等】

天然とヤンキーと宇・宙・上・等（前書き）

今回長いッス。

天然とヤンキーと宇・宙・上・等

「歌星いゝ！」

「ここはいつから君達の溜り場になった？」

ゾディアーツが暴れた次の日の朝、
けんごやこなた達が使っているある場所にある施設の部屋、そこにかがみのクラスメートの焦げ茶色のショートヘアに八重歯が目立つ女子生徒の日下部みさおとオデコが目立つ長い髪の毛で金髪っぽい女子生徒の峰岸あやのが居た。

「いいじゃんかゝ私達友達だろゝ」

女には優しいのか、けんごは否定する事無く溜め息を吐き用件聞くことに。

「それで一体何があつた？」

「兄貴が帰って来ないんだよゝ」

「兄貴………日下部みこと先輩か？」

その名前を言い当てるとみさおは頷く。

日下部みこと、この天高の二年でありみさおの兄、そしてあやのの彼氏でもある。

「うん、昨日負け犬公園の前で待ち合わせしてたんだけど何か事故があったみたいで居なかったの、待ち合わせ場所帰るならメールか電話してくれるはずなのに、心配になってみさちゃんに連絡したら」
「帰って来てないってことさ」

けんごはさっそくパソコンを使い昨日の負け犬公園での事件の詳しい内容を調べると出たのはカマキリの化け物、歌が鳴り響く仮面ライダーと出てきた。

「まさか……兄貴その戦いに巻き込まれて!？」

「だけど病院に運ばれていたなら日下部の所に連絡が来るはずだ……」
「F組行くぞ」

けんごは立ち上がり校舎へ戻ろうとするがけんごのクラスはF組ではなくその前のE組である。

みさおとあやのはかがみと同じE組の前のD組である。

「なんでF組？」

「この戦いに一人の魔導師が関わっている、その魔導師に会えばわかるだろう」

F組に居る魔導師、それは……

「昨日の騒ぎ？」

「ああそつだ」

F組にはフェイトと未来が居り、やはりいつも通り親子展開が。

(昨日のアレだよな)

（うんアレだね）

念話で会話し目を合わせていると。

「フェイト・テストロッサ、昨日負け犬公園で怪人と戦っただろ？
そこで日下部みこと先輩を見なかったか？」

その名前を聞いた瞬間フェイトはビクツとなった。

（もしかして……………アंकが取り付いたのって……………）

察しがついた。

（未来、今日アंकは？）

（一人で出回ってる、メダル探すとかって）

（あの状態で会わすわけにはいかないからね）

（わかってる）

しばし念話で会話していると。

「それでどうなんだよフェイト！」

「あ……………見なかった……………かな？」

それを聞いてがっかりしながらみさおとあやのは自分の教室へ戻り
けんごも戻った。

（フェイトちゃん……………）

（日下部先輩を何とか助ける方法考えよ？）

（うん）

二人は軽く念話するとホームルームが始まりその話はまた後でになる。

その頃アंकはメダル探しのため海鳴市を歩いていたが何か自分では珍しいものが目に入り未来から現金は渡されていたためそれで買った、それは……

「ッ！こ、これは……！」

アंकが買ったもの、それはアイスクャンディだ、それを一口舐めた瞬間アंकの脳（正確にはみこと）に衝撃が走る。

（もっと買おう）

と再びアイスクャンディを買いにスーパーに入ってしまった。
それを監視するものが一人。

「やはりか」

それは進で学生服ではなく黒いライダースーツを着てバイクに乗り
双眼鏡を使い覗いて見ていた。

（日下部…… お前が巻き込まれるなんて）

アंकが動き出したため進は黒いバイク、ライドベンダーのアクセ
ルを回し走りだし追跡を開始した。

昨日（二話前）ゾディアーツと戦ったげんたはオリオン・ゾディアーツに変身するためのアストロスイッチの使用者を探すため授業をすっばかして校内を走り回り情報を求めていた。

（絶対見付けてけんごを認めさせてやる！）

フォーゼとなり戦ったがスイッチをオフにし損ねたためけんごに自分の事を認めさせるためにアストロスイッチの使用者を探していた。だがやはりこれと言った手掛かりがなく校舎を歩いていると。

「君は？」

とある教師に見付かり逃げよ出した。

「何も逃げることは……」

教師……沖一也はげんたの後をゆっくり追った、自分もゾディアーツの事を知りたいからだ。

そしてげんたは物置部屋に入りあの空間に入りどこにあるかもわからない施設に入った。

「ここまで来れば……」

取り敢えずゾディアーツの事を調べるためパソコンのキーボードを分けもわからずめちゃくちゃに操作していると何か窺みたいなもの

がスライド、特殊なガラスが付いておりそこから見たのはなんと青く輝く美しい星、地球だった。

「もしかして…………地球!？」

驚いていると。

「いつ見ても、月から見る地球は美しいな」

「げっ!」

そこに一也がやってきてしまった、振り切ったと思ったのだが、だがそれよりも。

「月!？」

その単語に驚きを隠せなかった。

「そう、ここは月にある月面基地みたいだね」

一也はこの月面基地のシステムを知っているかのように語った。

「ここはラビットハッチ、17年前に事故でその月面基地の隊員達は全員死亡、

その後の事故の調査に俺も参加し、だが何も分からなかった」

「先生が、宇宙に?」

一也がなぜこの月面に来たかは理解できなかった。

「教師になる前はアメリカ国際宇宙開発研究者の科学者だったんだ、けどなかなか宇宙に行けなくて、

初めての宇宙がこの月面基地の調査だったんだ」

一也は昔を懐かしむように語るがげんたは疑問に思った、いや、誰もが疑問に思うことだ。

「だけど先生、あまり老けて……………」

そう、一也の外見は年齢に合わず、二十歳を後半過ぎた顔付きだったのだ。

その事についてもつとよく聞こうとしたら。

「げんちゃん！？それに沖先生！？」

こなたがやってきたのだ、ラビットハッチが月面にあるのなら物置部屋から月まであの光の通路が繋がっている事になる。

「授業始まつてるのに来ないからどこに居ると思ったら……………ここは秘密なんだよ？」

だが先ほども言った通りこなたにつかさ、かがみとみゆきやみさおとあやのの溜り場になっている。

「それなのにまさか先生まで……………！」

教師にこれがバレるのがどれほど大変かは想像しなくなかったが。

「大丈夫さ、言わないでおくから、それよりやっぱ地球は綺麗だね」

再び窓の方を向いて地球を見る。

「人類は長い間エネルギー問題に悩まされ続けていた、いくら魔力があってもその問題は解決されずにいた、けどもこの月で開発ができ、進めば電力、鉱石、あらゆる資源の供給が保証される」

げんたにはちんぷんかんぷんだったがこなたはその話を知っていた。だがその内容はまだ仮設の段階であるが一也は話続けた。それを言ってみると。

「それが現実だとしたらワクワクしない？
それが実現したらエネルギー問題から解放されてそしてさらなる宇宙進出」

一也は夢を叶える事に全力になる子供のような目で輝いていた。

「そしていつか太陽系も超えて外宇宙に……だから俺はS-1に……おっとこれは……だけど君ならS-1の意味、わかるよね？」

途中で止めたがこなたならそのコード名の意味がわかると悟りそれ以上は話さなかった。

「S-1って……沖先生はまさか……ドグマやジンドグマから地球を救った！」

ドグマ、ジンドグマ、その名前はげんたにも聞き覚えがあった、その二つは歴史の教科書にも載るほどのものでその二つの組織を倒したものの名前の開発コードがS-1だった。

「さて、君達は早く教室に戻って、授業が始まるから」

一也はラビットハッチから校舎へ戻った。

「あの先生があんなにすごい人だったなんてな」

「うん……げんちゃん、ちょっと一緒に来てくれる？」

「え？」

数分後、二人は宇宙服に着替え月面に立ち歩いていた。

「よくこなたに合う服あったな」

「失礼だね」

そんな会話をしながら歩いていると巨大なクレーターがあったがそれは人為的な意志でできたものだった。

「けんこのお父さん、ここで死んじゃったの」

けんごから聞いた話を静かに語り始めた。

ラビットハッチではけんこの父親がコズミックエナジーについて研究をしていたがアストロスイッチを悪用しようとするものにより殺害されてしまったことを。

「今のげんちゃん、なんか変だよ？」

認めさせたいとかライバル意識が一番に来てて本当にけんごと友達になりたいか怪しいよ？」

その言葉に反論できなかった、その通りだからだ。

「宇宙飛行士はね、絶対信頼ができるパートナーが必要な、げんちゃんにはけんこのサポートをしてほしいの、それに……けんごはお父さんが残したアストロスイッチやゾディーツを止めるのが仕事だって一人で抱えてるの」

そんな重いものを背負っている、そう感じるげんたは考えが改まり。

「こなた、けんこの所に連れていってくれ」
「もちろん」

二人はラビットハッチに戻り校舎へ戻った。

「まさか授業が午前中だなんて」
「アメフト部が試合ある日は絶対午前中で終わってほとんどの生徒が応援に行くの」

未来とフェイトは海鳴市に戻りうついていたが後ろから着いてくるのが二人居た。

（（この状態でアंकと会えない！））

とか思っていた矢先に。

「どうしたんだよお前ら？」

アイスクャンディを買いまくったアंकが来てしまった。

「アंक！今来て「兄貴！」あー……」

電信柱の陰からみさおとあやのが出てきてしまった。

「一体何してんだよ！髪まで染めて！」

「心配したんだよ！」

二人はアंकに近寄ると。

「あーあ、この体の妹とその女が」

その発言にアंकに詰め寄るが未来とフェイトに引き離され数分後、落ち着きを取り戻しわけを聞くことに。

「兄貴に腕の怪物が乗り移って！」

「もし離れたら命の危険があるう！？」

フェイトは頷く、話を聞くと二人は力が抜けたような姿勢になる。

「それじゃみことさんはどうなるの……」

「傷が自然に回復して意識が戻るのを待つしかない……もしかしてアंकを離して病院に送るか………だけどそんな事させてくれる分けないし………」

何かいいアイデアないか考えていると未来は。

「僕が………日下部先輩と一心同体になって自分の意識を封印して代わりに日下部先輩の意識を持つてくれれば………」

「お前、何……………」

みさおとあやのには意味が分からなかった、だがフェイトにはその意味が理解できた、したくないのに。

「そしたら未来が消えることに……………」

自分の意識を封印しみが生きる、実質未来の存在が消えることになる。

「もう嫌なんです……………手が伸ばせるのにしないのが……………それをしてもう後悔したくないんです」

過去に何かあったのか、それは未来にしかわからない。

「輝くん？」

すると後ろからアंकが肩を叩き。

「未来、ヤミーだ」

それだけ言うと走りだし未来は後を追った、三人も着いていくことに。

「これだけでも使いこなせないと……………！」

けんごはどこかの土地にある荒地で白いオフロードバイクに乗り
その運転を練習していた。
そこに一台の自転車が横を並び走る。

「なんだまた君か」

「けんご！お前の親父の話聞かせてもらった！」

「こなたか」とけんごは呟き走り続ける。

「それで同情と一緒にゾディアーツを倒そうとでも？」

「そうじゃねえ！一人で背負い込む事はないんだ！

誰かと一緒に背負ってその重荷を軽くしようってこと！

だからお前をサポートさせてくれ！そしてフォーゼにさせてくれ！」

端から見れば同情するようにも聞こえる、だがげんたは同情ではな
く心の底からけんごを手伝い、支え、友達になりたい、その思いか
ら言った言葉。

そのことを感じバイクを止めるとげんたも自転車を止める。

「水月……」

「やっと名前呼んでくれたな、名字だけだな」

遠くからこなたとつかさ、かがみとみゆきが見ていた。

「仲良き事は美しき事かな？」

「そうね、あの二人が仲良くなるにはまだまだ先の話だと思うけど」

そこにかがみの携帯に着信が入り通話に出てその相手の話の内容を
聞き。

「それ本当！？」

「どうかしたのお姉ちゃん？」

携帯を閉じしめると。

「ゾディアーツの正体、知ってるって子から電話があったの、知ってたければ風都第二スタジアムに来てだって」

「確かそこはアメフト部が他校と試合を……………」

四人はげんたとけんごにその事を伝え一緒に第二スタジアムへ向かうことに。

「ここだ」

アंकが来た場所はその風都第二スタジアムの近くにある銀行で、その中で動物などの ヤミーになる前の白ヤミーが暴れ札束や金品を強奪し吸収していた。

「すごい欲望だな、あれならまだ育つ」

「そんな事言っていないでメダル貸してください！」

「ダメだ、もつと太らせたる、豚ももつと太らせてから食うのが人間にとっては美味いんだろ？」

未来にコアメダルを要求するが拒み後ろにフェイト達三人が。

「あ、だがお前、人間じゃなかったな」

その言葉に衝撃が走った。

「お前に取り付いた時にわかっていた事だが……お前も俺と同じような奴がなんで人間を守るんだ？」

その問いに何も答えられずにいたが。

「未来は、化け物なんかじゃない」

「フェイト？」

フェイトはものすごい目付きでアंकを睨む。

「未来は貴様みたいに欲望塗れじゃない」

「へ、意志があるものは全員欲望を持っている、お前だってコイツにどんな欲望を抱いているんだろっつな」

「黙れ！」

フェイトとアंकが対峙していると第二スタジアムにげんた達が到着、入口には一人の女子生徒が居た、黒い長い髪の毛で何か不気味なオーラを放つ天川ともこだった。

「君か」

ともこが頷くとげんたは詰め寄ってゾディアーツの事を聞き出そうとしたががみに拳骨を食らう。

「最初は自信無くて教えなかったんだけど調べてみたら確信がついて」

「なんで協力してくれたんですか天川さん？」

「だって」

げんたを見て。

「この人が面白そうだから」

げんたとけんご以外は「確かに」と頷きながら呟きともこはオリオン・ゾディアーツのアストロスイッチの使用者の元へ誘う。

「ここか」

そこに一也がやってきて中に入るげんた達を見ていたら近くの銀行から巨大なカマキリみたいなオトシブミヤミーが現れた。

「また新しい敵……」

フェイトとアंकが対峙していると未来が。

「なら、僕があなたを倒し日下部先輩を解放して体の中に入って自分を封印する！」

「それはダメだ、絶対にな」

なぜこうにもダメを押すかはオーズは一度変身すると最初に変身した人間にしか使用できなくなる。

みさお達も未来の事は知っていたがここまで意志が強い男とは知らず驚く、しばしアंकと睨み合っていると折れたのか三枚のコアメ

ダルを未来に渡す。

「勝手にしろよ」

「後、人の命よりもしメダルを優先させたら僕は構わず君を倒し日下部先輩を救う」

「ああ！わかったからさっさと行け！」

未来は走りながらオーズドライバー腰に着けメダルを挿入していきバックル傾けるとオースキヤナーを持ちスライドさせメダルを読み込ませると「変身！」と叫び【タカ！トラ！バツタ】、そして【タツツバ！タツバ！タツツバ】と響き未来はオーズ・タツバコンボに変身しトラクローを展開しオトシブミヤミーに立ち向かった。

「輝が………仮面ライダー………」

「私も、行かなきゃ」

フェイトはバリアジャケットに着替えバルディッシュを持ち飛び立つとアंकは近くで戦いを見るために歩きだしみさおとあやのも着いていく。

スタジアムの通路でははやとアメフト部の部員三浦がもめていた。

「貴様、キングの俺にそんな口聞いていいと？」

「上文字さん、貴方はいつもそうだ、いつも人を見下すような態度を取って………けどもうこれも今日でお終いだ、これさえあれば」

三浦はアストロスイッチを出すがそれはどこか不気味で丸く目玉みたいな感じだったが【ラストワン】と鳴り充血しているような感じに。

「そんなオモチャで何ができる？」

はやとは呆れ歩こうとする、三浦はアメフトが好きなのだがボールにすら触らせてくれずやり場のない怒りに見舞われていたがある日アストロスイッチを渡されたのだ。

「待て！」

そこにげんた達とともにがやってきた。

「三浦！それを渡すんだ！」

「またお前がトラッシュ、そしてギークにその他」

その他は呼ばれて面子以外だろう、はやとは会場へ向かおうとしたら三浦はアストロスイッチを起動させてしまった。

「うわあああああつ！！！！！！！！！！」

三浦はオリオン・ゾディアーツに変身するが三浦の体は放り出され
繭に包まれたような状態でオリオン・ゾディアーツは棍棒と盾を持
ってパワーアップしていた、

これにははやともビビりげんたの後ろに隠れる。

「なんか変わってねーか？」

「あれはラストワンの形態、パワーアップしていて早く倒さないと」

三浦は人間に戻れなくなるぞ」

けんごはフォーゼドライバーをげんたに託した。

「頼んだ、水月」

「ああ」

フォーゼドライバーを腰に着けるとこなた達は後ろへ下がって角に隠れ頭を出して並ぶように覗く。

げんたは左手でロケット、ランチャー、右手でドリル、レーダーのスイッチを押し【3．．．2．．．1】と鳴りエンターレバーを引き左腕を軽く曲げ「変身！」と叫び右腕を挙げリングが現れそれが上に上がるとフォーゼに変身。

「宇宙キターッ！」と叫んでから「タイマンはらせてもらっぜ」と言いオリオン・ゾディアーツに挑む。

「君達、俺は何も見なかった、後はよろしく」

はやとは見てみぬふりをし去ろうとしたら突然天井が抜け尻餅を付き上を見上げるとオトシブミヤミが居た。

「アレもゾディアーツ!？」

「いや、違う!」

会場に居た人々はパニックになり逃げ惑う。

「セイヤーッ!」

「ハアアアッ!」

オーズのトラクローとフェイトのバルディッシュがオトシブミヤミ

ーを切り裂くがいいダメージはあまりだった。

「フェイトが戦ってるの？」

「そうみたいね」

フォーゼはオリオン・ゾディアーツを外へ連れ出す、こなた達は追って外へ。

会場はまだ避難できておらず、チア部も応援に来ていた。

「一体何よあれ！」

みうは怒りながら逃げているとスタジアムの天井が崩れ瓦礫の下敷きになりそうになり悲鳴を上げ死を覚悟すると「タカ！トラ！チャー！』と響くと痛みが全然感じずむしろ優しい温もりを感じ恐怖で閉じていた目を開くと視界に。

「大丈夫ですか！？」

オーズのタカヘッドの仮面が目に入った。

オーズは脚が素早さに優れたチャーレッグという黄色いラインが流れる脚、タカトラーターとなっており

「え、ええ……ありがとう」

みうはお姫様抱っこされており降ろされ立つと。

「ちょっと！貴方の名前は！？」

「あ、ひか……じゃなくて、オーズ、仮面ライダーオーズ！」

オーズはオトシブミヤミーに向かって走りだした。

「オーズ………」

みうの頬は少し赤かったとか。

「水月、ここで倒したら被害が出る」

ラストワン形態となったオリオン・ゾディアーツを倒すと爆発でスタジアムにも被害が及び逃げ遅れた人々が大変なことになってしま
う。

「それじゃどうしたら！」

「宇宙でリミットブレイクすると同時にスイッチを奪って切れ！」

「宇宙はともかくどこにあるんだよ！」

だがアストロスイッチはどこにあるかわからず。

「俺はお前が指示した通り戦う！」

「水月………」

「だから指示してくれ！」

その言葉を聞きけんごはノートパソコンを開き小型のメカ、バガミールのカメラを通してオリオン・ゾディアーツを調べる。

「早くしてくれ！」

フォーゼはオリオン・ゾディアーツの猛攻をしのぐ。
一方、タトバコンボに戻りオースもオトシブミヤミに苦戦していた。

「どうすれば……………」

そこに進が長い箱を持ち現れた。

「ある人からの誕生日プレゼントだ、受け取れ」

「え、あ、ありがとうございます……………」

取り敢えず受け取ると蓋を開け中には大剣メダジャリバーが。

「それにセルメダルを三枚入れろ」

言われた通りにセルメダルを三枚挿入。

「このバイクもプレゼントだ、そしてこれも」

進は黒い自動販売機にサンプルは赤と青と色とりどりの缶が並んでおりセルメダルを挿入しスイッチを押していくと赤い缶や青い缶が出てきて進はそれを取り蓋を開けると【タ・カ・カン】、【タ・コ・カン】と鳴り赤い缶のタカカンはタカみたく、青い缶タコカンはタコみたく変形すると自動販売機からタカカンやタコカンが大量に出てくる。

「よしー！」

オースはライドベンダーに乗り走りだすとタコカンが通路を作り空を駆けフェイトに近付く。

「フェイトちゃん！」

「未来！」

フェイトはライドベンダーの後部に乗りオトシブミヤミーの下を潜ろうとするとバルディッシュの刃が伸びる。

【Jet Zamber】

「撃ち抜け雷神！ジエツトザンバアアアアアーツ！！！！！！！」

バルディッシュの刃を上へ上げそのままオトシブミヤミーを真つ二つに切り裂き下を潜ると横を向きライドベンダーは停車、メダジャリバーにオースキャナーをスライドさせ「トリプル！スキャニングチャージ！」と鳴り響き刃にエネルギーが貯まっていく。

「ハアアアア……………セイヤアアアアアーツ！！！！！！！」

メダジャリバーを横に振るい必殺技オーズバツシュで遠くにいながらオトシブミヤミーを横に空間ごと斬ると敵以外空間は元通りになりオトシブミヤミーは爆発しセルメダルが辺りに散らばった。

「やったー！！」

オーズが勝ったのをアंकは見て。

「どうやら才能はあるみたいだな」

ぼそつと呟いていた。

「わかったぞ！胸の辺りにある！」

「オッケー！どうやって宇宙に？」

すると黄色い人型作業用ロボット、パワーダイザーが現れ。

「奴をランチャーのミサイルの爆発で宙に浮かせる！」

「ランチャー、これだな」

ランチャースイッチを押すと【ラン・チャ・ー・オン】と鳴り右足にロケットランチャーが現れミサイルを放つが違う所に当たる。

「レーダーでロックオンしろ！スタジアムを破壊する気が！」

だがスタジアムはボロボロであまり破壊しても目立たなかった。

「そうなの？」

レーダースイッチをオンにし左腕にパラボラアンテナが現れそれをオリオン・ゾディアーツに向け狙いを定めてからミサイルを放ち爆発により宙に吹き飛ぶ。

フォーゼはバイクに乗りパワーダイザーは変形しロケットの発射台となりバイクと合体する。

「これ、打ち上げるのか！？」

「そうだ」

カウントが終わるとバイクはフォーゼを乗せたまま飛び出しオリオ

ン・ゾディアーツにぶつかるそのまま宇宙へ飛んでいく。

「よく飛んだね」

「すごいですね」

「あれ？敵は？」

オーズとフェイト、更にみさおとあやのもやってきた。

「日下部に峰岸！」

「あ、柊ちゃん」

「オース、柊」

大気圏を越えて宇宙に着くとオリオン・ゾディアーツは吹き飛びゆつくり流れていきフォーゼはロケットモジュールとドリルモジュールを使う。

「よし！」

そしてエンターレバーを引きリミットブレイクを発動すると。

「ハッ！」

隣に銀色の体に赤い眼とマフラーのスズメバチをモチーフとした仮面ライダースーパー1が現れた。

「もしかして……」

「行くぞげんた！」

「はい！」

二人のライダーはオリオン・ゾディアーツに突貫。

「ライダーロケットドリルキイイイイイック！！！！！！！！！！」

「スーパーライダー！月面キイイイイイック！！！！！！！！！！」

二人の仮面ライダーの必殺技が炸裂しオリオン・ゾディアーツを倒すとフォーゼの手にはアストロスイッチが、オフにするとスイッチ自体が消えるがそのまま大気圏に突入し地上へ落下していく。

「うわあああああつ！！！！！！！！？」

どうすればいいかとか何かアストロスイッチを探していると一つのアストロスイッチが、リーダースイッチと入れ替えオンにすると左腕にパラシュートが現れ落下がゆっくりになっていく。

「ふう……………」

地面に着地すると変身を解いた。

「なんとかなつたぜ」

けんこに伝えると近くにスーパー1が降りる。

「仮面ライダー……………スーパー1！」

「ドグマとジンドグマを壊滅させた伝説の！」

上からこなた、かがみと喋るとスーパー1は変身を解く。

「沖先生!？」

スーパー1に変身していたのは一也だった。

「よくやったなげんた」

「ああ」

三浦がふらふらした足取りでスタジアムから出てきてげんたは「お前ともダチになるからな」と宣言する、三浦は嬉しかったのか笑みをこぼした。

「兄貴の体なんだけど、もう少しいいよ」

みことの体についてだがみさおとあやのが話し合った結果、ヤミーと戦うためオーズは必要だと思い、それに未来の存在が消えるのを嫌と感じたのもあるからだ。

「すみません、必ず日下部先輩を助ける方法見つけます」

未来はしょんぼりしながら言う。

「だけど輝って一体何者なんだ？」

「そうだよ、輝くんって何者？」

「僕は………ウルトラマンメビウスです!」

ニコニコ笑いながら自分の正体を明かしたのだった。
それに啞然としていたのは言うまでもない。

「そして次の日」

「水月、これはなんだ？」

ラビットハッチの壁にフォーゼの絵が描かれた旗が飾られていた。

「仮面ライダー部の旗だ、これからこの学校の平和を守る、それが活動内容だ、そもでもって部員一号はこなただ」

「いやゝ楽しそうだから乗っちゃった」

「因みに僕も部員です」

未来とフェイトもラビットハッチに居り。

「そして俺が顧問」

「一也も居た。」

「水月、やはりドライバー返せ」
「嫌だ」

「返せ！」

二人はフォーゼドライバーを巡り中を駆ける、その様子を笑って見

ていたのだった。

天然とヤンキーと宇・宙・上・等（後書き）

スーパードールが顧問！

次回【蘇る光の巨人】

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8413w/>

ヒーロー×アニメ物語

2011年10月9日15時37分発行